

十全同窓會會報

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会
編集委員会
印刷／ヨシダ印刷(株)

十全同窓会理事長就任挨拶

加藤 聖



この度、古川 仰理事長の後任として理事長職を拝命致しました加藤です。会員の皆様にと一言ご挨拶申し上げます。皆様には日頃より医学部の学生支援や卒前卒後研修等で大変お世話になっており改めて感謝申し上げます。創立以来約百五十年近い歴史と、現会員数約七千名を擁する本会の理事長に選出されましたことは大変光栄に存じますと同時に、責任の重さを痛感しております。佐藤保同窓会会長始め会員皆様の暖かいご協力を賜りながら本会発展のために精一杯務めさせていただく所存です。ご指導ご鞭

撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

私は昭和四十八年に本学を卒業し、旧神経情報研究施設情報伝達部門に入局し、以来ずっと基礎医学教室に在籍しております関係上、臨床の方々にはお目にかかったことがない先生方も沢山いらっしゃると思いますが、これからはできるだけ多くの会員の諸先生方とお会いしお話しさせていただきます。なお現在全国に四十五の十全同窓会支部があり、様々な活動が報告されています。今後本会と支部との交流も益々活発にしていきたいと思っております。お声をかけていただければ皆様の元に向き、ご意見ご要望を医学部同窓会に反映させていただきます。

近年臨床初期研修の開始による地方中核病院の医師不足が深刻な問題となっていました。このことに対して、大学と同窓会の大合唱のお陰で政府も重い腰を上げ、ようやく医学部入学生定員数の増加や初期研修医の地方出身大学病院への定着

数の増加につながってきました。今後益々、医療の諸問題に対して大学と同窓会の皆様との意見交換が重要になってくるものと思われれます。その橋渡し役ができればと考えています。

さて、本同窓会の当面の最大課題は来たる平成二十四年春に開催される創立百五十周年記念事業です。記念事業の骨格もようやく本決まりとなり、また百五十周年記念誌の内容も決定致しました。目玉は講内に製作されることになりましたモノUMENT（記念碑）と十全講堂前のプロムナード（遊歩道）の建設です。モノUMENTについては現在金沢美術工芸大学と交渉中です。その他、記念館の改修、記念式典、記念シンポジウムの開催が予定されています。会員の皆様には会報を通じて詳細をお知らせしていきます。また百五十周年に向けて同窓会報の紙面もいよいよ充実させ新企画なども掲載していくつもりです。これらの記念事業を通じて我々同窓生の学びの故郷である本学百五十周年の歴史と先人方のご労苦を偲ぶと共に、創立二百年、三百年に向けた未来への発展を誓う大切な記念式になればと考えております。

会員の皆様には百五十周年記念事業へのご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。また十全同窓会や百五十周年記念事業などについて何なりとご高見をお寄せいただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが会員の皆様の一層のご繁栄をお祈り申し上げます。

目次

理事長就任挨拶	1
創立百五十周年記念事業の進捗状況と寄附のお願い	2
総会記事	3
総会講演抄録	6
論説	9
追悼文	10
十全学術行脚 第十九回	11
受賞	12
学会報告等	13
金沢大学関連病院長会議	15
御遺骨返還式・合同慰霊祭	16
医学展開催に向けて	16
病院紹介	17
教室だより	19
支部だより	21
クラス会	21
同窓生の消息	22
医師会コーナー	23
医学部百五十年史のための覚え書 [29]	24
学生コーナー	25
ホームカミングデイ	26
第三回金沢大学未来開拓研究公開シンポジウムへのご案内	26
編集後記	26

創立百五十周年記念事業の 進捗状況とご寄附のお願い

井 関 尚 一

本年四月、金沢大学医学部創立百五十周年記念事業推進準備委員会（以下、準備委員会）の長を前任者の金子教授から引き継ぎ、五月二十五日に今年度第一回の準備委員会を開催しました。そこで決定された事業内容の変更点を含めて、現在までの準備状況をご報告いたします。

まず募金の状況ですが、昨年十月に医学部HP上に記念事業の趣意書を掲載して募金事業を開始して以来、本年八月十八日現在で二〇、八六〇、〇〇〇円が集まりました。このうち六、七一九、〇〇〇円は二〇〇八年五月以来の現職教員の給与と引きによるもの、五〇〇、〇〇〇円が十全同窓会大阪支部からのご寄附によるもの、残り一三、六四一、〇〇〇円が同窓会員を中心とする個人（法人を含む）のご寄附によるものです。これまでに寄せられたお志に篤く御礼申し上げます。趣意書によれば募金活動の期限は二〇一五年三月までとなっておりますが、全学における創基百五十周年の記念式典が予定される二〇一二年五月頃をひとつの目安として、それまでに実現する事業と、その後に正式決定して着工する事業に分けるべきだと考えております。

事業内容として、昨年の趣意書では十全講堂前プロムナード整備、医学部記念館の改修、医学部百五十年史の編纂、記念シンポジウムと記念式典の開催を挙げ

ました。このうちプロムナードについては、全学のキャンパス整備事業として国への概算要求事項とすべきだということとで、五月の準備委員会では記念事業から外されました。しかし国家財政の逼迫を考えると、やはり寄附金によるほか実現の道はないという意見もあり、プロムナード整備は検討継続ということにいたします。医学部記念館については、十全講堂とともに同窓会のご寄附によりつくられたという経緯があり、約二〇年前の医学部学術振興募金により十全講堂の方は十分な改修がなされていますので、記念館の改修を記念事業として残しました。

新規事業として決定したのは、宝町キャンパス内に設置するモニュメントの制作です。現在、「若き医師群像（仮称）」というものを考えております。題材となるのは、明治九年に撮影されて現在金沢市医師会が所蔵している金沢医学館初代卒業生九名の羽織袴姿の集合写真です。これを等身大の銅像として台座に置いたものをモニュメントとすべく、金沢美術工芸大学の彫刻専攻の教授に費用見積もりをお願いしたところ、二十万、二十五万、〇万円くらいになりそうです。設置する場所としては基礎研究棟の中庭緑地が候補のひとつです。九月中に予定する第二回の準備委員会です承が得られ

れば、年内にも発注させていただき、二〇一二年に開催を考えている医学部としての記念式典での除幕に間に合わせる予定です。さらに、大手町の金沢医学館跡地に石碑を建てるという案も寄せられており、今後検討いたします。

もうひとつ、新たに加わった事業として、キンストレーキのデジタル・アーカイブ化があります。先日同窓会総会で除幕式を行ったキンストレーキについて、国宝修理所による修復の際の分解と組み立てを詳細に記録した膨大な数の写真をデジタル画像とし、文字とナレーションを加えてDVDをつくる作業をすでに開始しました。見違えるほど美しくなったキンストレーキですが、内部構造を見る機会は今後半永久的にないと思えます。このDVDにより、内臓を含むすべてのパーツについてご覧いただくことができます。完成したら、数年前につくられたDVD「金澤医科大学時代の教育・研究・診療風景」と同様に、有料配布としたいと考えております。

記念事業のメインとなる医学部百五十周年記念誌の制作については、編纂作業委員会により順調に進められており、現在「教室史」の執筆を各分野に依頼しています。記念誌もまた、有料配布を考えております。記念シンポジウムと記念式典についてはまだ未定ですが、今後全学の創基百五十年記念事業における同様な催しとの関係を考えてうえで計画を立てて行く予定です。

以上に挙げたうち、記念館改修（及びプロムナード整備）事業以外で、二〇一二年五月までに仕上げる予定の事業の費用としては、三千万円余が見込ま

れ、これは現在までの募金ペースで実現可能な数字です。これにどれだけの募金額が上乗せされるかにより、記念館改修（及びプロムナード整備）事業の規模が決まることとなります。記念館改修費は、施設部の見積もりによれば、内装のみから外装や周辺の全面改修に至るまで、二千万円程度から一億円以上までの幅があります。準備委員会としては、記念館の雰囲気をもっと明るくする、また十全講堂との連絡通路をつくって一体的に使用する、などの可能性を視野に入れております。プロムナードについても見積もりを得る予定です。

以上、ご報告申し上げます。募金については、現職教員による寄附をさらに増やす努力をいたします。そのうえで同窓会員におかれましては、ご多端のおり、二〇年前に引き続き再び大きなご寄附をお願いするのはまことに心苦しいことではありますが、創立百五十周年の節目を迎えますことから、よろしくご協力を賜りますようお願い申し上げます。



金沢医学館第一期生

総会記事

平成二十二年度 十全同窓会総会開催

平成二十二年度の十全同窓会総会が去

る七月三日(土) 医学部記念館において開催された。今回遠方から十二支部代表を含め、総勢六十六名の参加があり、まず議長に佐藤会長を選出し同会長の挨拶と会員名簿作成への謝辞が述べられた。続いて五十六名の物故者会員に黙祷を捧げた後、会長より各支部代表の紹介が行われた。次に、古川理事長より昨年度の会務報告が行われた。続いて松井研究科長による研究科報告がなされ、引き続き高安賞の最優秀賞杜娃博士、優秀賞の橋本優実博士、トウウィチエン博士の表彰が行われた。次いで井関医学類長より医学部報告並びに、同窓会百五十周年事業の取組みが話された。次に、会長より各



支部代表の紹介が行われた。

その後議案審議に移り、松井会計理事から平成二十一年度会計決算報告が、倉西監事より監査報告があった。引き続き松井理事より本年度の予算案の説明があり、いずれも了承された。また古川理事長より同窓会資金の危機管理、資金運用の説明があり了承された。次に役員交代が報告され主なものとして、古川副会長、加藤理事長、大井会計理事、中尾監事の就任が了承された。

引き続き古川理事長の退任挨拶、加藤

平成二十一年度決算報告ならびに平成二十二年予算について

平成二十一年度決算

表一に一般会計の決算書を示します。会費収入は名簿作成効果により予算より大幅に増加しました。雑収入ではDVD頒布に係る分配金が継続した収入となっています。

支出では、事業費が少々減額となりました。会報の頁数が少なかったこと、会報発送代が宅配便採用で減少したことなどがその理由です。補助費は記念館整備が延期されたためその分減少しました。名簿作成費は、従来通り特別会計で決算することとしました。予備費から、名簿

理事長の就任挨拶が行われた。その後医学部学生の課外活動への支援金・補助金交付が会長より行われた。続いてキンストレキの修復につき山本研究域長から説明があった後、全員で一階の資料室に移り新しい陳列ケースに納められたキンストレーキの除幕式が行われた。その後新任教授講演会が始まり最初に谷内江教授(小児科学)の「炎症性疾患の病態評価と早期診断のために」サイトカイン・プロファイレリングと細胞解析を駆使した「アプローチ」の講演が佐藤会長の司会で、続いて長瀬教授(経営企画部)の「制度、データと医療経営」の講演が中村副会長の司会で、最後に吉崎教授(耳鼻咽喉科学)の「頭頸部腫瘍と頭頸部外科」の講演が古川理事長の司会で行われ、出席者

情報変更サイト作成、ホームカミングデイ負担金その他を支出しました。

全体としては、支出の節約で昨年に引き続き三百万円を基金へ繰り込んだ後も、昨年以上の金額を二十二年に繰り越すことが出来ました。

付随する特別会計では、十全同窓会基金会計からは、金沢大学附属病院新外来棟記念式典補助を支出しました。名簿作成会計では、免除会員の先生方からの賛助が大きな収入となっています。高柳奨学金会計は、平成二十一年度は奨学生三名に対して支給しました(表二・五参照)。以上の決算報告に対して監查理事から会計監査報告がなされ承認されました。

一同最新の知見に聞き入り、時間を忘れる程であった。

講演会終了後、懇親会が開かれ佐藤会長の挨拶、中川正明埼玉支部長の発声による乾杯の後、各支部代表による支部の報告がなされ、和やかな内に交歓の会が進行し、奈良支部坂上正義先生の中締めで午後一時四十五分盛会裏に閉会した。

(加藤 聖 記)



平成二十二年予算

表六をご覧ください。会費収入は例年とほぼ同額を見込みました。金沢医科大学時代のDVDの購入希望があるため、雑収入を期待しました。

支出では、前年度並でしたが、十全同窓会ホームページの作成費を予算し、新たに学生課外活動「In the Kanazawa」への補助金、ホームカミングデイ開催負担金を計上しました。基金への繰込みに関しては会費の収入率が回復し、一般会計が軌道にのるまで調整した額としました。

百五十周年記念事業としては、記念施設設備(記念館改修工事・モニメント建設)、記念誌の発行、記念式典の開催などが、募金活動を中心に考えられています。

(会計担当 松井 修 記)

(表1) 平成21年度決算書

自 平成21年 1月 1日
至 平成21年12月31日

収 入				支 出			
科 目	予算 (円)	決算 (円)	摘 要 (円)	科 目	予算 (円)	決算 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	1,832,060	1,832,060	平成 21 年度会費	事 業 費	5,997,656	5,446,051	会報印刷製本・封筒代 2,686,005
会 費 収 入	12,580,000	15,108,000	4,000 円×2,117 人 8,468,000				アカンサス印刷代 27,440
			過年度分 833 人 5,672,000				会報・アカンサス発送代 1,536,800
			平成 21 年度以降会費 412,000				関連病院長会議・関連病院渉外費
			準会員会費				200,000
			6,000 円×90 人 540,000				卒前研修支援 (S P 研修会支援) 200,000
雑 収 入	183,480	291,676	4,000 円×4 人 16,000				学生課外活動支援
			預金利息 1,494				(西医体) 300,000
			H20 年 SP 研修会				(立山診療班) 100,000
			支援金からの返金 95,122				(白山診療班) 100,000
			DVD 頒布に係る分配金	旅 費	850,000	772,890	会費払込用紙印刷代 24,150
			(KUTLO より) 15 部 133,860				新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) 271,656
			総会祝儀	会 議 費	330,000	326,822	各支部総会への出張費 387,730
			(四高・法経文学部) 20,000				各県支部長総会招待旅費 353,880
名簿会計より繰入	2,536,163	0	旅費等返金 41,200				理事会出席・監査の為の来学旅費 31,280
基金より繰入	2,000,000	2,000,000		慶 弔 費	100,000	75,060	総会、理事会、会報編集委員会、名簿編集委員会
							326,822
				補 助 費	2,700,000	2,499,040	弔電 (7 件) 4,060
							御香典 (3 件) 50,000
							生花一对 (1 件) 21,000
							記念館展示室整備 0
							図書館医学部分館整備補助 299,040
							学生課外活動補助 (ACLS) 80,000
							医学展補助 100,000
							「大学院医学系研究科」進学説明会補助金
							20,000
							金沢大学附属病院新外来棟完成記念式典
				事 務 費	2,730,000	2,772,794	2,000,000
							会費払込料金、プリンター修理・感光体・トナー、
							通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料
							392794
				雑 費	60,000	60,000	人件費 2,380,000
				支部への補助費	500,000	420,000	会報袋詰め作業代 60,000
				名簿作成費	4,500,000	0	11 件 420,000
				基金への繰込み	0	3,000,000	0
				予 備 費	1,364,047	1,332,372	十全同窓会基金口座へ 3,000,000
							会員名簿情報変更サイト制作、ホーム
							カミングデイ負担金、その他
							1,332,372
				繰 越 金		2,526,707	
計	¥19,131,703	¥19,231,736		計	¥19,131,703	¥19,231,736	

(表2) 十全同窓会基金会計報告書

自 平成21年 1月 1日
至 平成21年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	138,845,023		補 助 費	2,000,000	金沢大学附属病院新外来棟記念式典 補助
繰 入 金	3,000,000	一般会計 (十全同窓会普通預金) から			
利 息	2,204	北國銀行普通預金利息			
	425,919	北國銀行定期預金利息			
	8,084	北陸銀行定期預金利息			
	1	北陸銀行普通預金利息			
計	142,281,231		計	2,000,000	残高 ¥140,281,231

(表3) 十全同窓会会員名簿作成会計報告書

自 平成21年 1月 1日
至 平成21年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
繰 越 金	2,536,163		事 務 費	315,297	払込手数料、名簿掲載確認届等印刷費
雑 費 収 入	3,680,000	企業協賛 (2社) 免除会員協力@5,000×728件	通 信 費	255,095	郵便料・料金受取人払、名簿学年担当調査費
	1,539	普通預金利息	謝 金	485,000	謝金・ホームページ改訂作業謝金
計	6,217,702		計	1,055,392	残高 ¥5,162,310

(表4) 高柳奨学会計報告書

自 平成21年 1月 1日
至 平成21年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	8,126,365		奨 学 金	675,000	H21年度 奨学生3名 (25,000円/1 ヶ月)
利 息	4,970	普通預金利息			平成21年4月～平成21年12月分
計	8,131,335		計	675,000	残高 ¥7,456,335

(表5) 金沢大学医学部史会計報告書

自 平成21年 1月 1日
至 平成21年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	3,315,014				
利 息	2,028	普通預金利息	—	0	
雑 収 入	0				
計	3,317,042		計	0	残高 ¥3,317,042

会 計 監 査 報 告 書

平成21年度 金沢大学医学部創立2・3百年祭小泉基金

上記会計科目報告の収入および支出に関し、帳簿および証拠書類に間違いなく、

現在高についても相違ないことを確認した。

平成22年 2月10日

監事

加藤 豊

監事

正橋 剛二

監事

倉西 久雄

会 計 監 査 報 告 書

平成21年度 金沢大学医学部十全同窓会会計

金沢大学医学部十全同窓会基金会計

十全同窓会会員名簿作成会計

高柳奨学会計

金沢大学医学部史会計

上記会計科目報告の収入および支出に関し、帳簿および証拠書類に間違いなく、

現在高についても相違ないことを確認した。

平成22年 2月10日

監事

加藤 豊

監事

正橋 剛二

監事

倉西 久雄

(表6) 平成22年度予算書 (案)

自 平成22年 1月 1日
至 平成22年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	2,526,707		事 業 費	6,334,428	会報印刷製本代 2,700,000
会 費 収 入	12,872,000	22年度会費 4,000円×1,800人 7,200,000 過年度分 4,500,000 平成22年度以降会費 480,000 準会員会費 6,000円×112人 672,000 4,000円×5人 20,000 預金利息 5,000 DVDに係る分配金 133,860			会報発送代 2,000,000 会費払込用紙印刷代 26,000 アカンサス印刷代 50,000 アカンサス発送代 50,000 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 卒前研修支援 (SP 研修会支援) 200,000 学生課外活動支援 (西医体) 300,000 (立山診療班) 100,000 (白山診療班) 100,000 新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) @ 2,772×99本 274,428 会報製本代 No.101～No.145 各2冊 84,000 十全同窓会ホームページ制作 250,000 各支部総会への出張費、各県支部長総会招待 旅費、会報取材旅費 総会、理事会、編集委員会 330,000 弔電等 100,000 記念館展示室整備 200,000 図書館医学部分館整備補助 300,000 学生課外活動補助 (ACLS) 50,000 Live-Aid Kanazawa 60,000 医学展補助 100,000 「大学院医学系研究科」進学説明会補助金 20,000 ホームカミングデー開催負担金 20,000
雑 収 入	138,860		旅 費	1,000,000	旅費、会報取材旅費
			会 議 費	330,000	総会、理事会、編集委員会
			会 費 収 入	100,000	弔電等
			補 助 費	750,000	記念館展示室整備 200,000 図書館医学部分館整備補助 300,000 学生課外活動補助 (ACLS) 50,000 Live-Aid Kanazawa 60,000 医学展補助 100,000 「大学院医学系研究科」進学説明会補助金 20,000 ホームカミングデー開催負担金 20,000
計	¥15,537,567		事 務 費	2,750,000	払込料金、プリンター修理・感光体・トナー、通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料 500,000 人件費 2,250,000 会報袋詰め作業代 (年3回分) 60,000
			雑 費	60,000	その他
			支部への補助費	500,000	
			基金への繰込み	2,000,000	
			予 備 費	1,713,139	
計	¥15,537,567		計	¥15,537,567	

総会講演抄録

炎症性疾患の病態評価と早期診断のために…サイトカイン・プロファイリングと細胞解析を駆使したアプローチ

血管発生発達病態学(小児科学)教授 谷内江 昭宏

古くから小児科医に課せられた重要な役割の一つは、髄膜炎や敗血症などの重症感染症を的確に診断して治療を行うこととした。発熱や全身状態不良を訴える小児に対して私たちがとりわけ力を注ぐのは、ありふれた感染症の中に紛れ込む重症例を見逃さないように訓練されているためです。一方で、感染症の予防・診断・治療の方法が進歩した現在、このような小児科診療のパラダイムは少しずつ変化してきています。そのような変化の中で、私たち小児科医が新たに力を尽くすべき分野の一つが、これまでは「不明熱」あるいは「リウマチ性疾患」とされてきた「炎症性疾患／免疫性疾患」に分類される疾患です。「診断基準」という道具によって安易にゴミ箱的診断名を与えられていた、多様な炎症性疾患の病態を明らかにして、適切な診断法や治療介入の方法論を提示するのが私たちに与えられた新しい課題と考えています。

遷延する発熱疾患、あるいは重症発熱疾患の中でも私たちが特に注目しているものに全身型若年性特発性関節炎(sJIA: systemic juvenile idiopathic arthritis)とEBV関連血球貪食症候群(EBV-HLH: EBV-associated hemophagocytic lymphohistiocytosis)があります。この二つの疾患はいずれも、通常のアプローチでは正しい診断に至らない場合があること、私たちが駆使しているサイト

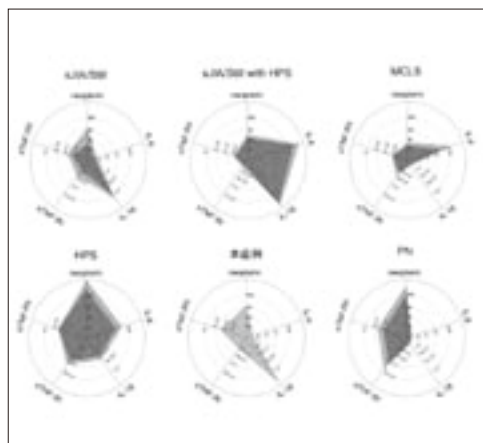
カイン・プロファイリングや細胞解析の手法により早期診断が可能である点が共通しています。特に複数の炎症性サイトカインの定量とそのプロファイリングによる炎症病態の評価や、フローサイトメトリー法を駆使したT細胞活性化、T細胞クローン増殖の評価は、金沢大学附属病院内の他診療科のみでなく、全国の複数の医療機関からの相談実績を重ね、高い評価を受けています。

sJIAは成人SLE病と類似の病態を示す疾患と理解されますが、まだその本態はわかっておらず、しばしば診断に難渋する小児疾患の一つです。小児科領域ではJIAの範疇に入れられており、「診断基準」を基に診断される疾患です。一般的には二週間以上遷延する発熱、発熱に伴い出現する皮疹、肝脾腫、さらに全身の炎症病態を伴う「関節炎」と定義されています。したがって、他の症状や検査所見がsJIAに合致するものであっても、関節炎を示す客観的な証拠がない場合はなかなかこの疾患と診断するのが躊躇されます。一方で本疾患はステロイドなどを用いた強力な抗炎症治療が必須であること、マクロファージ活性化症候群などを合併して致死的な経過をたどる可能性があることから、早期の正確な診断が望まれる疾患でもあります。

このような診断に苦慮するsJIAにおいては、サイトカインプロファイリングが

極めて有用です。特にsJIAは炎症性サイトカインの内、IL-6が異常な高値を示すことが報告されており、私たちの検討でも初発時には正常対照の千倍以上の高値を示すことが明らかにされています。さらにIL-6やneopterinなどの他の炎症性サイトカインを同時に測定すると、炎症病態によって特徴的なパターンを示すことが明らかにされました(図1)。

サイトカインによる炎症病態の解析; sJIAではIL-18が特微的に高値を示し、限定的に高値を合併しないカインは他のサイトカインは低値に留まる。川崎病(MCLS)はIL-6が高値を示す一方、IL-18は正常値のことが多い。sJIAに特微的なプロファイルを示した。



EBV-HLHは通常のEBV感染症(伝染性単核症)と異なり、EBVがB細胞ではなく、T細胞に感染することにより発症する、急性の致死的疾患です。この疾患は特定のキラーT細胞クローンにEBVが感染、感染細胞が腫瘍性に増殖しながらEBVなどのサイトカインを大量に産生することにより発症します。そ

の診断は、末梢血中にEBV量が増加していることを示すことが有用ですが、迅速検査としては不適です。私たちはフローサイトメトリー法により、EBV感染細胞の増殖を確認することにより早期診断を行っています(図2)。

私たちが現在駆使しているこのような病態解析の方法論は、多様な炎症性疾患の早期診断に寄与するだけでなく、病態が不明な多くの疾患の本質に迫る解析も可能となっています。今回紹介させて頂いたsJIAやEBV-HLHは、比較的短期間で診断、治療がなされるものですが、診断困難な炎症性疾患の多くはその症状が年余に及ぶことがあります。若年発症のこのような疾患について、私たち小児科医がその早期診断にどのように関わる事が可能か、患児や家族の苦痛を早期に取り除き、合併症を防ぐための治療的介入が適切にできるかが問われています。そのような問いかけに答えるために、ここで述べたサイトカインプロファイリングや細胞解析のみでなく、遺伝子解析や細胞培養など多様な方法論を駆使して、問題解決の努力を続けています。

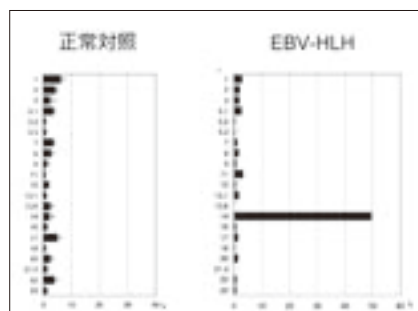


図2 末梢血T細胞抗原受容体解析; CD8⁺T細胞の中で、特定の集団(Vβ14)のみ選択的に増殖しているのがわかる。

制度、データと医療経営

医療経営学（経営企画部）教授 長瀬 啓介

医療の組織化とデータ

患者を収容して医療を提供する場である病院の歴史は長い。しかし、病院運営を科学的に、つまり、再現性のある方法により病院の運営を分析し設計するにいたったのは、比較的近い時代になつてからであり、わが国で、このような科学的な運営に目が向けられたのはさらに遅れ、第二次世界大戦後GHQがわが国の病院運営を前近代的とみなして以降のことである。近年の医療経営の逼迫をふまえ、医療経営学講座がいくつかの大学で整備されつつあり、近代化に必要な人材の育成が始まっている。

再現性あるアプローチはデータに基づくものである。そして医療はそれ自体が付加価値を生産することが困難であることから、データに基づいて医療供給の制度を設計することが、医療機関の目的に沿った持続的な運営つまり医療経営に重要であることを、本日お伝え出来ることができれば幸いである。

現代の病院を取り巻く課題

現代の病院における経営あるいは管理上の課題は、短期的に対応が求められる財務および法務にかかわる管理上の諸問題と、中長期的に病院が課題として抱えるであろう人口構造の変化に伴う経営上の諸問題に分けて考えることができる。以下、これらの課題のいくつかについて、データに基づく再現性あるアプローチの可能性と実績を例示してみたい。

短期的課題（財務および法務にかかわる諸問題）

医療の工程を標準化し、使用される医療資源を削減し、平均在院日数を制御する目的で、わが国ではClinical Pathwayと呼ばれる図表を利用することが広く行われている。Clinical Pathwayは合併症の減少および診療記録の改善に有意な寄与をするが、再入院率および院内死亡率を改善することはまだ示されておらず、Meta-Analysisでは病院の費用ないしは料金および平均在院日数の減少も評価が困難とされており、その効果についてはいまだ研究の余地がある。

そもそも、Clinical Pathwayは、プロジェクトにおける工程管理の手法を簡略化したものである。医療以外の領域では工程の把握と介入の効果予想にPERTが用いられているが、医療においてもPERTにより適切にCritical Pathを客観的に見出し、その効果を定量的に予測することができ、Clinical Pathwayの開発に当たっては、本来当然に客観的なCritical Pathの同定と効果予想に基づくべきではないか。

医療機関の広告が規制されているわが国において、広告や広報の効果が投資に見合うのかは疑問視されてきた。この効果についても、一定の方法により測定することが可能であり、広告や広報の戦略および戦術についても適切な指標を設定することで、評価可能である。

医療安全の領域に対する投資と効果についても、一定の手法により評価することが可能で費用効果性を予測することが可能である。Hazardの発生までおよびHazardからLossの発生までの過程を特性要因図で分析し、対策を特定し、この対策の費用と効果（Loss発生確率の低減）を推定することで、有効な対策を費用効果的な範囲で選定することができる。

近年においては、術前に手術により生じうる合併症について十分な説明を行う医療慣行が定着したが、二〇〇〇年当時はまだ十分に普及していなかった。この当時であっても、不適切なインフォームドコンセントにより説明されていない合併症が生じることによる訴訟リスクよりも、説明の費用が低かった。

以上のとおり、法的規制がかかわる病院の運営に関する課題であったとしても、課題を定量的に分析し、将来予測を行うことが出来る。

中長期的課題（人口構造の変化に伴う経営上の諸問題）

今後、少子高齢化の進行に対応するため、医療サービス供給体制としては、量の調整（a）国内での医療サービス供給能力の増加、（b）国内での医療サービス需要の抑制）および効率の向上（c）医療サービス提供の効率化）が課題となる。

（a）国内での医療サービス供給能力の増加については、医師の労働力構造を分析したところ、（一）男性医師と女性医師では、専門性の選択に性差がある。（二）男性医師と女性医師では、ワークスタイル（就業場）と女性医師では、ワークスタイル（就業場）の年齢の変化に性差がある。（三）医学部の定員が変化しない過去十五年の間に新卒医師の男女構成比が変化している、と

の三点が明らかとなった。この結果を応用すると、若手外科医師の数の減少は、女性医師の比率によりほぼ説明されることがわかり、今後増加する女性医師の診療行動の医師養成数など医療サービス供給能力設計への影響を評価する必要性が示された。

次に、（b）国内での医療サービス需要の抑制については、患者が外国で医療を受ける可能性について調査したところ、年齢・性別・所得により行動が強く影響されることが明らかとなり、医療サービス需要の増大の原因となる高齢者そして女性では消極的傾向が見られ、一定年齢以下の人口をターゲットとすべきことが明らかとなった。

最後に、（c）医療サービス提供の効率化についてであるが、医療の知的労働部分について効率化する臨床判断支援機能を開発し運用に供した。しかし、判断基準のモデル化、定量化および合意がなされず、その機能が活用されなかった。知的労働の軽減と高度化のための情報技術は整いつつあるが、その恩恵をうつけるためには、医師が医学的知識を客観的に記述し、標準的知識に合意し、そしてそれを遵守する意図がなければならぬことが示された。

今後の展望

数理科学および情報科学が、近年の目覚ましい基礎医学および臨床医学の発達を支えているが、患者の生命を直接救う臨床現場である病院の運営や医療政策で、数理科学および情報科学を活用しデータに基づいた医療経営や制度設計が普及しないことは、きわめて奇異である。常に科学は、科学のほかの領域の発達の影響を受け、相互に影響しあいながら発達しており、本学医学系研究科においても学問領域の多様性を活用した発展が期待される。

頭頸部腫瘍と頭頸部外科

感覚運動病態学（耳鼻咽喉科学）教授 吉崎 智一

「頭頸部腫瘍」、「頭頸部外科」。どちらも一般市民は元より、医療関係の方々にもなじみの薄い病名および診療科です。そして、これが、私の専門とする分野です。大学に頭頸部外科という講座はなく一般には耳鼻咽喉科のサブスペシャリティーとして頭頸部腫瘍を専門とするグループがいる場合に頭頸部外科を標榜する場合が多い。そして、がんセンターや癌研病院では「耳鼻咽喉科」はなく「頭頸科」もしくは「頭頸部外科」です。これら頭頸部外科医の八割は「耳鼻科」出身者、残りの多くは「外科」の甲狀腺専門から頭頸部へ対象を広げてきたものたちです。外科医減少が社会問題となる今日、主な医師供給先がマイナー科の耳鼻咽喉科である「頭頸科」、「頭頸部外科」が、すでに事実上消滅したがんセンターもあります。

頭頸部腫瘍は良性、悪性、両方を包括する用語ですが、ここでは、悪性腫瘍について述べます。全身の約10%を占める頭頸部は、複雑な骨組織、筋組織、皮膚粘膜構造、リンパ組織、神経および血管走行を有します。そのため、安全域を十分つけての切除はしばしば困難であったり、切除の結果生じる機能障害は著しくQOLを損なうものであったりします。頭頸部癌は口腔、咽頭、喉頭など管腔臓器から発生するものと耳下腺、甲狀腺な

どの頸部軟部組織から発生するものに大別されます。後者は腺癌系が多く、手術治療が中心となるのは前世紀から変わりませんが、前者は扁平上皮癌であり、手術以外に、放射線療法が奏効します。単独化学療法が局所制御や生存率向上に果たす役割は不明確ですが、各種化学放射線療法に関するエビデンスの蓄積、そして、強度変調放射線治療に代表される放射線治療技術の進歩など、化学療法および放射線療法の果たす役割は大きくなりました。さらに、腫瘍の栄養血管を同定して、そこから直接抗がん剤を投与する動注化学療法などインテンシティの強い治療がどんどんと開発され、局所制御率は向上しつつあります。一方で、進行がんに対する生存率自身の改善は不十分であること、臓器は温存できる様になったものの、機能は温存どころか障害され、その結果、経口摂取や鼻呼吸が十分に出来ないというQOLの問題など、新たな課題が出現してきました。

頭頸部癌の原因は一樣ではありません。主として、アルコール、喫煙による口腔、中咽頭、下咽頭、喉頭癌が代表的ですが、Epstein-Barr ウイルスが癌に関与する上咽頭癌、パピローマウイルスが関与する中咽頭癌など、ウイルス感染が原因と考えられているものもあります。これらの発癌にいたるバックグラウンドの違

いは、化学療法、放射線療法に対しての感受性の違いとして反映されます。そのため、同一組織であっても、ウイルスの検索は、バイオマーカーとして有用であることが示唆されます。

頭頸部外科は基本的には外科的治療を専門とする集団でした。切除技術の進歩、再建術の進歩、周術期の管理技術の進歩などがいま一つ、それ自身は進歩を遂げています。しかし、前述のように、頭頸部癌に対する治療法はいずれの方面でも著しく変化をしています。このように多岐にわたる頭頸部癌に関する診断、治療のイニシアチブをとるのは、都市部では頭頸部外科医であることが多いのですが、全国的に見ると頭頸部外科を専門とする耳鼻咽喉科医である場合が多いのが現状です。臨床の現場ではTNM分類に基づいた病期分類と治療方針で対応しています。放射線感受性や薬剤耐性、転移能など分子レベルで、癌のプロファイルが明らかにされてゆく時代へと突入してきました。今後は分子からミクロ・マクロそして社会までを総合的に視野に入れて臨床に応用してゆかなければならないと思います。

そして、我々自身も頭頸部癌治療の標準化を推進する一方で、出されたガイドラインや治療方針をそのまま踏襲して臨床に應用するのではなく、頭頸部癌および患

頭頸部癌の病因論的特徴

中咽頭癌
下咽頭癌
喉頭癌
口腔癌

酒・タバコがリスクファクター
多重癌・多発癌の可能性が10-20%

副鼻腔(上顎)癌
聴器癌

慢性炎症を母体にして発生
(蓄膿症・中耳炎)

上咽頭癌
口腔・中咽頭癌

ウイルス発癌
(EB ウイルス・パピローマウイルス)
唾液感染・接触感染・STD!?

者に対して、前述の分子から社会環境までをばらひろく、かつ、深く洞察する視点を持ったphysician scientistとして、positiveに周りを巻き込みつつ、成長してゆきたいと思っています。

論 説

金沢大学医学部創立百五十周年記念誌の編纂について

同編纂委員会委員長・会報編集委員 山本 博

一、二〇一〇年シャルジャ

本年五月二十九日、アラブ首長国連邦シャルジャ大学初の医学部卒業式と、同日オープンされた同大学医学研究所および臨床外科研修センターの開所式に招かれ出席してきました。シャルジャ大学はたいへん若い大学ですが、キャンパスはおそらく世界一。臨床外科研修センターは生体ファントムモデルを用いた内視鏡手術トレーニングシステムほか最先端の研修設備を備え、研究所ではフランスやオーストラリアからの研究者ががんやサラセミアに関する研究を開始しようとしていました。医系キーパーソンのHamdy副学長は「研修を希望する医師を世界中から受け入れたい。シャルジャは教育・文化・医療立国を目指しています」と語りました。筆者は「かつて加賀藩が目指し、金沢大学にいまも継承されているところと通じるものがあります」と応え、本学の過去・現在・未来に想いを馳せたことでした。

二、二〇一二年金沢

金沢大学は、文久二年（一八六二年）の彦三種痘所開設を濫觴とし、二年後の平成二十四年（二〇一二年）に医学部創立百五十周年を迎えます。これを期に、様々な記念事業が構想されています。全学にあつては、「金沢大学創基百五十年記念事業準備委員会」（委員長 柴田正良附属図書館長）が、後述する彦三種痘所推定跡地での記念碑建立などの事業を計画しています。医学類に

あつては、「金沢大学医学部創立百五十周年記念事業準備委員会」（委員長 井関尚一医学類長）が記念式典の開催、記念モノメンツの建立、医学部創立百五十周年記念誌の編纂ほかの事業を計画しています。本学より古い歴史をもつ医学部として、安政四年（一八五七年）長崎奉行所内医学伝習所での開講にはじまる長崎大学医学部と、安政五年（一八五八年）開設の江戸お玉が池種痘所を淵源とする東京大学医学部があります。両大学では、それぞれの創立百五十周年にあたり、種々の記念事業が行われました。

三、記念誌編纂

創立百周年の後には故西田尚紀先生を代表とする編纂委員会によつて「金沢大学医学部百年史」が、百三十周年には山口成良名誉教授を長とする編纂委員会によつて「金沢大学医学部百年史以後三十年の歩み」が編纂、刊行されました。来る百五十周年の節目にも、来し方を振り返り、また、行く末を展望し、さらに、諸資料を収集、整理して後世に託すべく、百五十周年記念誌編纂委員会が組織されました。委員会は、平成二十年度に発足、平成二十二年九月現在までに十二回開催されています。現在のメンバーは「百年史」「百年史以後三十年の歩み」に関与された寺畑喜朔先生、山口成良先生、赤祖父一知先生、中村信一学長を特別委員、加藤聖教授、山本健教授、山本博、中村裕之教授、三邊義雄教授、太田哲生教授、中

尾真二教授、吉崎智一教授、佐々木素子准教授、和田隆志教授（卒業年次順、同学年は五十音順）を委員とする計十四名です。記念誌の基本構成は、A「通史」（グループ長 山本博）、B「教室史および関連部局史」（グループ長 中尾委員）、C「余滴または思い出」（グループ長 加藤委員）、D「写真」（グループ長 山本健委員）の四部から成ります。教室史、余滴等を担当される同窓の諸兄姉や教員各位には、お世話をおかけしますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。平成二十四年度内の刊行を目指しております。同窓会員の皆様には「百年史」の折と同様に有料頒布する予定です。

なお、記念誌編纂と関係する事業として、「キンストレイキー平成の修理」（仮題）のデジタルアーカイブ化も企画され、解剖学の井関尚二教授、尾崎紀之教授、若山友彦准教授、易勤准教授、篠原治道金沢医科大学教授を中心に作業が進められています。

四、彦三種痘所跡地の推定

「通史」グループの焦眉の急は、全学の「創基百五十年記念事業」にも関係する、彦三種痘所の跡地の推定でした。当時の種痘法は、生きた牛痘苗を善感した子供から子供へと植え継いで行くやり方であつたため、親子同伴が原則であり、種痘所は武家地内ではなく、道路幅がより広く人の往来が自由にできる町地内に設置するのが医療上も社会的にも妥当であつたと考えられました。赤祖父特別委員の熱心な調査、考証と炯眼により、加賀藩認可の種痘所は当初は町地であつた常福寺上地町校旧屋敷に置かれたと推定され、この地所は元治元年に武家地である彦三八番丁に組み入れられたことがわかりました。この推定跡地は、現金沢市安江町一番三十三十一号付近に相当

します。現地を訪ねてみますと、道路の中も曲り角も、さらには地所中の段差までも江戸時代からほとんど変わつておらず、人々が種痘のため行き交う様子が目に見えるようで感無量でした。

五、医学部創立百五十周年には同窓会会報第百五十記念号も発行

金沢大学医学部十全同窓会会報は年三回発行されています。今号は二四六号ですから、このまま予定どおり進みますと、記念すべき百五十号は医学部創立百五十周年を迎える平成二十四年の新年に発行される計算になります。これは、寺畑特別委員のご指摘によります。偶然とはいえ、これは誠に吉兆慶事にちがいありません。医学部創立百五十周年記念事業という医学部・医学類の行事と、同窓会報第百五十記念号の発行という十全同窓会の行事とが同じ年に同期して行われるのですから、大学と同窓会との協調と連携が将来に亘り円滑に行われることは必定と推察される次第です。

六、資料ご提供のお願い

金沢大学医学部創立百五十周年記念誌用の資料候補と考えられる文書や写真等がございましたら、ご提供あるいはご連絡いただければたいへん幸いに存じます。連絡先はつぎのとおりです。

〒九二〇一八六四〇

金沢市宝町十三番二号

金沢大学医学部創立百五十周年記念誌

編纂委員会

担当／角野浩一総務係長 宛

（電話：〇七六―一六五―二二〇五）

同窓会員の皆様のご支援とご協力を心よりお願い申し上げますとともに、各位のご健勝と弥栄を祈念いたします。

追悼文

梅田良三名誉教授追悼

金沢大学副学長 古川 仩



金沢大学医学部耳鼻咽喉科学講座第七代教授梅田良三名誉教授が、平成二十一年十二月三日、心不全のため逝去された。享年八十五歳であった。先生は、大正十三年十月三十日、福井県武生市でお生まれになった。戦時中は魚雷の製作に従事していたという先生は、終戦後、心機一転して工学系から医学を志し、昭和二十一年五月金沢医科大学入学、二十五年三月同大学を卒業された。二十六年五月、松田竜一教授主宰の耳鼻咽喉科学教室に専攻生として入局された。昭和二十八年十月、文部教官・附属病院助手となり昭和三十三年四月、金沢大学講師になり、昭和三十三年四月同助教授を経て昭和四十八年六月豊田文一教授の後任として金沢大学教授に昇進された。入局から退官まで大学病院一筋という、稀有なキャリアの持ち主である。この間、大学病院の使命である教育・研究・臨床に

従事され、地域医療への多大な貢献があった。昭和六十三年四月から二年間、金沢大学医学部附属病院長として附属病院の管理運営にも貢献され、平成二年三月に定年退官を迎えられた。

先生の業績に関しては枚挙に暇がないが、当教室六代松田竜一教授の指導のもとに開始された「嗅覚障害の診断と治療」に関する研究がライフワークとして自他ともに広く認知されている。主なものを列挙すると、昭和四十六年七月「ルーチンテストとしての嗅覚検査法について」の論文で総合医学賞（医学書院）を受賞された。また、昭和四十七年五月、日本耳鼻咽喉科学会総会で「におい検査の臨床上の問題点について」の特別講演を担当された。さらに昭和五十六年五月、日本耳鼻咽喉科学会総会において「嗅覚障害の診断と治療をめぐる」宿題報告を担当された。中でも特筆すべきは我が国で開発され、現在臨床現場で普及している経静脈的嗅覚検査（いわゆるアリナミン・テスト）の臨床的評価に関する論文が当教室から多数発表されたことである。末梢性と中枢性嗅覚障害の鑑別診断や、障害の予後判定検査としての有用性が検証された。おかげで金沢大学耳鼻咽喉科教室の嗅覚研究は国内のトップランナーとして位置づけられるようになった。研究は現在も脈々として受け継がれ、

昨年金沢医科大学耳鼻咽喉科学教室へ赴任した三輪高喜教授との共同研究の形で継続されている。

先生は教授在任中、日本耳鼻咽喉科学会北陸地方部会連合会長を努められ十八年間に五十三回におよぶ学術講演会を開催された。北陸における耳鼻咽喉科学の発展に多大な貢献をされたばかりでなく、昭和六十一年には新たに日耳鼻学会・石川県地方部会を創立し、会長として地域の耳鼻咽喉科医療の向上に尽力された。

全国規模の学会としては、昭和五十三年十月、第三十回記念日本気管食道科学会を会長として開催された他、昭和五十六年十月、第四十三回日本耳鼻咽喉科臨床学会、昭和六十三年五月、第八十九回日本耳鼻咽喉科学会総会並びに学術講演会を会長として開催された。これらの業績に対して退官後、金沢大学名誉教授、日本耳鼻咽喉科学会、日本気管食道科学会、日本鼻科学会、日本耳鼻咽喉科臨床学会からは名誉会員の称号が授与された。

先生は定年退官後、老人保健施設の設立に努力され医療法人「なでしこの丘」の初代理事長として老人の健康管理、リハビリ、デイケア等におしめない努力を払われ、施設の管理運営と発展に尽くされた。その先生の活躍ぶりは、雑誌「味蕾」五十四号に、「この人あり、昨日、今日」で掲載された。「定年退官後十年間の思い出」と題して施設での雑感を診療録風に執筆されたものだが、業務を通じていろんな人との出会いの楽しみに加えて、お年寄りの良き理解者として専念された先生の温厚・篤実な人柄が文章の

節々ににじみでており、何時読んでもほのぼのと心温まる思いがする。

先生は平成十四年四月、勲三等に叙され皇居において旭日中綬章受賞の榮譽に輝いた。長年、医学部臨床教授として教育・研究・臨床に貢献された功績ばかりでなく、附属病院長時代、特定機能病院として高度先進医療の開発や先進医療の実施に努力された功績や、多数の良医を排出して、北陸地方における医療の向上に勤めてこられた業績など、医療活動と社会福祉活動に一貫して貢献されたことが評価され認められたものである。

平成十五年、先生が傘寿を迎えられたとき、同門会としてのお祝いの相談に自宅を伺った。先生は、昔を振り返り感慨深そうに第三十回記念日本気管食道科学会開催にまつわるエピソードを話された。学会直前に助教授が不慮の交通事故で亡くなった事件は未だに私も忘れることはできない。先生は、その時味わった悲痛な思いと学会担当者の苦悩を吐露された。先生は県立能楽堂での能楽界重鎮による半能「石橋」を立案され、学会理事長はじめ多くの会員から絶賛を博したことは今でも学会の語り草であり、先生の誇りとするところであった。改めて学会担当者の心得、資格を教え諭された気がする。まだまだ、大所高所からのご指導をお願いしていたところであった。今は、悠々自適の生活の中、囲碁に親しむ先生の姿が思い出されてならない。在りし日の梅田良三先生を偲び、先生のご冥福を心からお祈り申しあげるばかりである。

十全学術行脚 第十九回

愛媛県・高知県

タイトルバックの写真は板垣退助像と高知城

今回は、四国で活躍の十全同窓会員のご紹介を致します。愛媛大学浅野喜博教授(昭和四十七年卒業)には近況をご報告いただき、高知大学橋本良明教授(昭和五十一年卒業)には編集委員中村裕之が、大学の現状や研究の一端についてお聞きしました。



愛媛大学大学院医学系研究科免疫学・感染病態学分野
教授 浅野 喜博

平成八年九月に愛媛大学医学部細菌学講座教授として赴任してから、すでに十四年が過ぎようとしています。

平成十三年四月に研究内容を反映するように講座名称を免疫学感染病態学講座と改称し、さらに、平成十八年四月からは、大学院の組織改編により、医学系研究科医学専攻システムバイオロジー部門感染生体防御学講座免疫学感染病態学分野と称しています。准教授と私は、感染生体防御学講座感染分子制御学分野を併任しています。

当講座は医学部教育のうち、免疫学の系統講義と細菌学・ウイルス学の系統講義および実習を担当しています。当講座の四名のスタッフと統合医科学講座の一

名のスタッフの計五名で分担担当しております。教育の負担はかなり大きいと感じています。このほかに、二年次および三年次学部生に対する医科学研究の指導を行い、毎年二名を受け入れています。

大学院への入学者、特に基礎講座への入学者がほとんどいないのが、研究科全体としての問題点であり、また、地方大学の共通の悩みと考えられます。医学部を活性化し、このような状況を打破するため、昨年度、医学部を中心としてプロテオ医学研究センターを立ち上げました。これは、愛媛大学で開発研究されている小麦胚芽を用いた無細胞タンパク質合成技術を基軸に、感染症、自己免疫疾患、加齢、腫瘍、神経疾患、再生医学の面から疾患に挑む研究組織で、ゲノム情報を基にプロテオ医学を実践するセンターです。当講座も、自己免疫疾患病理解析部門および新興・再興感染症部門に協力講座として参加しています。

細菌学は免疫学と極めて密接に関係した学問領域であり、免疫学はもともと細菌学から発展してきた学問です。感染症に伴う宿主の免疫病態の解析は免疫学の重要な研究テーマの一つとなっています。愛媛大学へ赴任まではもっぱら、T細胞を中心とした免疫応答制御機構を解析していましたが、赴任後は研究の方向

を少し変えて、これまでの知見を細菌学と免疫学の境界領域の研究としてより発展させ、生体防御機構の細胞生物学的・分子生物学的解析を目指して研究を進めてきました。この過程で、パリ・パスツール研究所のCossart博士、ドイツ・ビュルツブルグ大学のGoebel博士、そしてドイツ・ミュンヘン工科大学のFleiss博士との共同研究を行うことが出来、研究も少しずつ進んでいます。

赴任して十四年、前住地の東京から愛媛に来て、地方大学が中央の大きな大学に比べて、様々な面でハンディを背負っていると感じましたが、その反面、ゆとりと自分の思うままに研究をすることが出来る環境があると言う、大きなメリットも持っていると感じています。しかし、これまでを振り返ってみてあまりたいしたこと出来なかったとも感じています。定年までの残された一年あまりの時間を、有意義に過ごせたらと思っています。



高知大学医学部
法医学講座
教授 橋本 良明

一、先生は、法医学教授として高知大学にご赴任後、現在では高知大学医療学系長として高知大学の要職にお就きになられておりますが、医療学系長としての役割など、高知大学の組織なども含めてお聞かせください。

平成三年一月に高知医科大学法医学教室の教授に赴任してから今年で十九年も過ぎました。高知医科大学は平成十五年

に旧高知大学と合併、その後、法人化し、国立大学法人高知大学医学部となりました。さらに教員組織(研究組織)と教育組織を分離するという組織改革を行い、平成二十年から医学部の教員組織は他の人文社会科学系や自然科学系などと同じ教育研究部に一元化されました。金沢大学医学部が同じように、研究組織と教育組織が医学系と医学類に分かれていますので、十全の先生方もご理解して頂けるかと思いますが、その組織をより実効性のあるものにするための産みの苦しみも同じかもしれません。医療学系長としては基礎医学部門、臨床医学部門、連携医学部門(法医学はここに属します)、医学教育部門、看護学部門を統括し、教員の採用や人事考課の基準を作り、大学の活性化のための教員評価を行っております。

二、先生の現在の研究内容をお聞かせください。

法医学講座のスタッフは、教授一名、助教三名(学内講師一名含む)ですが、法医学解剖という社会的な使命もあり、構成員の協力が欠かせません。高知県全域の司法解剖を実施しておりますが、今年に入ってから五十五例(八月末現在)を数えます。研究内容も司法解剖という特殊性を活かして、非常に貴重な知見が得られました。例えば、自殺者の組織中ニコチンおよびその代謝産物を調べることで、自殺者が特に自殺直前に喫煙量が極めて多くなることをつきとめ、喫煙量の増大は自殺の徴候であるという警笛を鳴らすことができました。また新生児や乳児からもニコチンが検出されて

おり、妊婦や家族の受動喫煙の問題も明らかにしました。動物実験ではニコチン殺と関連しますが、遺体組織、特に下垂体や副腎皮質、唾液腺からのストレスの指標としてクロモグラニンAの有用性についても研究してきました。独居高齢者の飲酒や薬物中毒の問題点も明らかにしてまいりましたように、社会医学的な現象をこれまでとまったく違う角度からみることができました。

受賞

岡田 保典 (昭和四十九年卒業)

慶應義塾大学医学部病理学教室
平成二十二年度 文部科学大臣表彰 科学技術賞(開発部門)受賞

この度、平成二十二年度の科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞(開発部門)を受賞しました。科学技術分野の文部科学大臣表彰は、「科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、もって日本の科学技術水準の向上に寄与すること」を目的とし文部科学省が表彰しています。科学技術賞(開発部門)は、「社会経済、国民生活の発展向上などに寄与し、実際に活用されている画期的な研究開発・発明を行った個人、またはこれらの者を育成した個人」を対象としています。今回受賞した業績名は、「組織内活性制御機

三、最後に、会員の先生方へのメッセージをお願いします。

現在、医療学系長として高知大学の医学研究発展を第一に尽力しております。高知大学では各学部の教員が従来の縦割りではなく有機的に協力し合う体制として文理医融合の組織となっており、横断型の組織を有する点で、金沢大学が大きな手本だと思います。今後とも、十全同窓会の皆様には何卒ご支援、ご指導のほど宜しくお願い申し上げます。

構解明に基づく血清MMP-3測定法の開発」です。私は約二十五年前に米国留学中に関節リウマチの関節滑膜細胞から新しい酵素が産生されることを見出し、本酵素をマトリックスメタロプロテアーゼ-3 (matrix metalloproteinase-3(MMP-3))と名付け、その後の我々を含めた世界の研究者による研究でMMP-3遺伝子ファミリーが確立されています。多種類のMMPに関する我々の研究から、MMP-3は関節リウマチ滑膜細胞により大量に産生されることを明らかにするとともに、細胞外マトリックス分解活性や他の潜在型MMPの活性化など組織内活性制御機構を解明しました。次いで、それらのデータに基づいてMMP-

3に対する特異抗体を用いたサンドイッチイムノアッセイ法を企業と共同開発し、関節リウマチ患者血清中のMMP-3濃度を簡便、正確、短時間で測定することを可能にしました。本イムノアッセイ法は、関節リウマチの関節滑膜病変を反映する世界初の新侵襲的検査法として平成十三年から保険収載されており、本開発により従来の検査法では検出できなかった関節リウマチ滑膜炎の活動性や関節破壊の予測を可能にし、生物学的製剤の治療効果判定にも役立つています。文部科学大臣表彰科学技術賞は、金沢大学医学部卒業業者では機能再建学(旧整形外科科学講座)の土屋弘行准教授(受賞時)と富田勝郎教授(受賞時)の共同受賞と経血管診療学(旧放射線医学)の松井修教授の受賞について三件目であり、大変光栄に思っております。私は、昭和四十九年に金沢大学を卒業し、旧病理学第一講座、旧医療短期大学部、がん研究所を経て、平成九年十月より慶應義塾大学医学部病理学教室教授に就任し現在に至っております。MMPとその近縁遺伝子ファミリーSADAM (a disintegrin and metalloproteinase)ファミリーについて、関節破壊や癌細胞の増殖・浸潤・転移機構について研究しております。これまで十全同窓会会員諸先生から多大なご支援・ご援助をいただいております。本受賞内容にも旧整形外科科学講座の富田教授や同講座に所属されていた先生方との共同研究データが含まれております。これまでのご支援に感謝申し上げます。これに、今後とも同窓会の先生方のご指導・ご援助を心よりお願い申し上げます。

第六回 十全医学賞

形態機能病理学(旧第二病理)
原田 憲一(平成三年卒業)

この度、栄誉ある第六回十全医学賞をいただき、金沢大学医学部卒業生として大変光栄に存じます。また、本年七月九日には受賞式ならびに記念講演の機会もいただきました。誠に有難うございました。私の受賞テーマは、「胆管における自然免疫機構と病態形成の解析」です。近年私は胆道系自然免疫の解析を中心に行い、原発性胆汁性肝硬変、胆道閉鎖症、肝内結石症などの胆道系疾患に見られる胆管病変の病態形成に胆道系自然免疫応答が深く関わっていることを明らかにしてきました。今年は卒後二十年目の節目の年であり、入局以来研究してきた胆道系疾患の病態解明についての研究内容が、ご評価いただきまして大変うれしく光栄に存じます。今後も胆道系疾患の病態解明を目指して、若手研究者と精力的に研究していく所存です。十全医学協会会長および選考委員の先生方、また直接ご指導いただいております中沼安二教授をはじめ金沢大学形態機能病理学教室にて一緒に研究に携わった先生方、また平素よりご協力いただいております国内外の先生方に深謝いたします。十全医学会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻いただきますよう宜しくお願い申し上げます。

第八回 高安賞

平成二十二年七月三日に金沢大学十全記念館で開催された十全同窓会総会の席上で、研究科長から三名の医学系研究科大学院修了者に「高安賞」が授与された。最優秀論文賞は杜娃博士に、優秀論文賞は橋本優実博士・Yidu Yuchen博士に授与された。

「高安賞」は、高安病の発見者である高安右人先生（本学眼科三代目教授、旧制金澤医科大学の初代学長）の本学および我が国、世界に対する多大な貢献と業績を記念して平成十五年に制定されたものであり、今年で八回目となる。その疾患は明治十四年四月に福岡市で開催された第十二回日本眼科学会で最初に報告された。またその原著論文は十全会雑誌第五十号に掲載されている。

また「高安賞」は本学同窓会会員臼井溢氏（昭和三十九年卒業）からの寄付を基金として発足したものである。対象は、医学系研究科の博士課程を修了した者で、優れた学位論文を発表したと評価された者を表彰し、研究者が席を置く講座の学術研究の振興および若手研究者の育成に貢献することが目的である。毎年、複数の委員からなる「高安賞」選考委員会で厳正な審査が行われ、今年は五十四編に及ぶ英文学位論文が選考対象となった。今回選ばれた右記三名、さらに僅差で及ばなかった医学博士の諸君には、今後とも研究に、診療に活躍され、自らの業績を伸ばし、さらなる本学の発展に貢献されることを切に希望する。

（松井 修 記）

第六回 黒川良安賞及びスロイス賞

医王保護者の会の支援に基づき医学類の成績優秀学生を顕彰する黒川良安賞及びスロイス賞の授与式は、今年で六回目を迎えた。

黒川良安賞は、卒業する学生のうちから選ばれた片山恵さん、坂下なつみさん、小林英士さん（成績順）の三名に対して、平成二十二年三月二十三日の学位記伝達式の席上で授与された。

またスロイス賞は、三年次を修了した学生のうちから選ばれた野口和寛さん、三輪隆志さん、和田明梨さん（成績順）の三名に対して、平成二十二年四月七日の入学式当日に開催された医王保護者の会総会の席上で授与された。

（井関 尚一 記）



学会報告等

第十七回 日本チエコ外科シンポジウム

第十七回日本チエコ外科シンポジウムは、平成二十二年六月五日（土）から六月七日（月）まで、金沢大学医薬保健学域医学系がん局所制御学分野の太田哲生教授を会長として、金沢市文化ホールにて開催されました。

本シンポジウムは平成十三年に慶應義塾大学名誉教授 阿部令彦先生とチエコのカレル大学教授 ミロス・ハヤック先生が中心となって、日本とチエコの外科科学の交流・発展を目的に設立されたものです。当時、両教授は国際外科学会 (International College of Surgeons) のそれぞれの国の部会長の要職にあり、その際の交友を基に生まれました。本シンポジウムは両国の文化交流や親睦も兼ねており、それぞれの国で毎年交互に開催されています。公式言語は英語で、今回はチエコに加えてドイツから十題、日本からは十八題、合わせて二十八題が発表されました。

内容は、外科学の総論から、食道、胃、大腸、肝胆膵、肺、乳房、ヘルニア、救急外科などの



各論に至るまで、多くのテーマについてハイレベルな発表と活発な討論が行われました。ランチョンセミナーとして、久留米大学の藤田博正教授に「食道癌の治療成績と病院規模の関係」について、岩手医科大学の若林 剛教授に「腹腔鏡補助下肝切除術」について、大変興味深い講演をいただきました。またイブニングセミナーでは金沢大学の渡邊 剛教授に「ダビンチを用いた心臓のロボット手術」、藤田保健衛生大学の前田 耕太郎教授に「MITASを応用した早期大腸癌に対する治療」が発表され、いずれも高度の技術を披露していただき、出席していた外科医は皆すばらしい画像に釘付けになっておりました。さらに特別講演として、石川県出身の元チエコ駐在大使で、金沢学院大学名誉学長である石田寛人先生に「人形劇と子供歌舞伎」のご講演をいただきました。金沢は歌舞伎や能が有名ですが、一方プラハではマリオネットによる人形劇が非常に盛んとのこと、両国・両都市の文化に精通されておられる石田先生ならではのご講演で、まさに日本とチエコの交流を深める意味で大変意義のあるものとなりました。なお、六月五日には金沢で開催された百万石行列の見学をかねて、チエコの先生や同伴の方を、兼六園や金沢城にご案内し、金沢の歴史や美観に触れていただく機会を設けることができ、お互いの親睦を深めることができました。

今回のシンポジウムの開催に当たり、金沢大学第二外科同門会、金沢大学十全医学会、金沢大学消化器・乳腺・移植再生外科のスタッフを始め、多くの方々にご支援をいただきました。皆様には心よりお礼を申し上げます。

（藤村 隆 記）

平成二十二年度 十全医学会学術集会開催さる

去る七月九日(金)に十全講堂において平成二十二年度十全医学会学術集会が開催された。今年は横田崇教授、加藤聖のコーディネートの下『再生医療の最前線—分子からiPS細胞まで—』と題して、学外四名の講師および学内四名の指定討論者の講演が行われ、梅雨時にもかかわらず総勢二七四名の来場者があった。

最初に、大井集会理事による開会の辞があり、第一席として京都大学iPS細胞研究所講師の高橋和利先生による「ヒトiPS細胞のこれまでとこれから」が井上正樹教授の司会の下行われた。同氏はiPS細胞の産みの親、山中伸弥教授の直弟子で、iPS細胞の誕生に至るまでの経緯や今後の再生医療において腫瘍性のないiPS細胞作製技術の開発の課題について話された。

次いで理化学研究所幹細胞研究グループリーダーの丹羽仁史先生の講演「多能性を規定する転写因子ネットワークの動態」が横田教授の司会の下行われた。同氏はiPS細胞



岡野氏講演風景

胞の多能性について転写因子ネットワークの観点から明瞭に話され、進化の側面からも話された。

続いて加藤の司会の下、理化学

研究所網膜再生グループリーダーの高橋政代先生が「再生医療におけるiPS細胞の可能性と今後の課題」のテーマで網膜視細胞と色素上皮細胞のiPS細胞やES細胞からの分化誘導の話と、網膜変性疾患特に網膜色素変性症や黄斑変性症への応用についての話を中心にiPS細胞の安全性や今後の課題について語られた。

最後に米田幸雄教授(薬学系)の司会の下、慶応大学教授の岡野栄之先生の「iPS細胞を用いた再生・創薬研究」のテーマで、iPS細胞からの脊髄損傷やパーキンソン病モデルマウスへの細胞移植の話があり、更にiPS細胞の腫瘍原性への安全面や先天的遺伝子疾患患者から作ったiPS細胞を用いた創薬研究の話があった。

以上iPS細胞の基礎から臨床応用まで最新の知見が発表され、来場者一同深い感銘を受けた。予定時間を超過するほど熱心な討論もなされ、本学再生医療研究の発展に大きく寄与する学術集会であった。

(加藤 聖 記)



会場風景

第十九回 日本がん転移 学会学術集会・総会

第十九回日本がん転移学会学術集会・

総会は六月十六(水)・十七日(木)金沢市文化ホールにて開催され、三〇〇名を超える参加者があった。本学会が金沢で開催されるのは二〇〇三年に故磨伊教授が会長を務められて以来である。今回の学術集会は、転移研究分野における「若手研究者の飛躍」と「国際交流」を重点課題として企画をした。今回の学術集会では、転移研究のキーワードとして「がん幹細胞」と「分子標的」を取り上げ、シンポジウムにおいて重点的に議論した。「がん幹細胞」ではがん研究所の仲准教授、本学出身で国立がん研究センターの増富博士らが、「分子標的」はがん研究所の矢野教授がオーガナイズし、同教室の山田助教らが発表した。ミニシンポジウムではがん研究所の大島、平尾教授と金沢出身の武藤誠京都大学教授が、がん研究における「マウスモデル」について最新の知見を講演した。現在、転移・悪性化・薬物耐性等の根本理解として「がん



研究奨励賞を受賞した王博士(中央)、矢野教授(左)、筆者(右)

幹細胞」というアプローチが注目を集めている。そこにさらに「マウスモデル」が加わり、その進展からは目が離せないホットな領域となっている。「分子標的」についても新規分子標的の探索に加え、薬剤耐性についてもそのメカニズムの解明にともなう標的分子が明らかになりつつある。

国際交流の場としては、外国から若手研究者を招聘し、国内の若手研究者との交流を促進する国際交流セミナーを企画した。独・日本・中国出身で現在、異国の米・豪国で活躍している新進気鋭の研究者たちであり、同年代の日本の若手研究者も刺激を受けたことと思う。本セミナーには、二〇一二年にオーストラリア(メルボルン)で国際MRS (Metastasis Research Society) ミーティングを開催する予定のMRS副会長 E. W. Thompson 博士(メルボルン大学)も招待した。

今年度の研究奨励賞の一件はがん研究所腫瘍内科研究員の王博士が受賞した。本学会では本学出身の清水教授(東大・医科研究所長)、岡田教授(慶応・病理)も活躍している。今回の金沢での学会について、「転移研究のメッカと称される金沢大学がん研究所の面目躍如」と多くの先生方からお褒めの言葉を多数いただいた。以上、第十九回日本がん転移学会は盛況のうちに幕を閉じることができました。ご協力いただいたがん研究所の諸先生方、とりわけ矢野腫瘍内科教授および太田哲生第二外科教授には厚く御礼申し上げます。最後に、今後とも日本がん転移学会に対してご理解・ご協力をお願いします。

(佐藤 博 記)

第五回 研究所ネットワーク国際シンポジウム

二〇一〇年六月二十四日(木)、二十五日(金)の両日、KKRホテル金沢にて、がん研究所が主管施設として、第五回研究所ネットワークシンポジウムを開催いたしました。国立大学の附置研究所のうち生命医科学を研究領域とする、東北大学・加齢医学研究所、東京大学・医科学研究所、京都大学・ウイルス研究所、京都大学・再生医科学研究所、大阪大学・蛋白質研究所、大阪大学・微生物病研究所、九州大学・生体防御医学研究所ならびに本研究所が共同で、研究体制の連携と共同研究の推進を通して、社会への貢献を進めるべく、本シンポジウムを五年前から、各研究所の持ち回りで毎年一回開催しています。五回目の今回のシンポジウムは、がん研究所が企画・開催いたしました。

今回のシンポジウムでは、がん・感染症・再生医学に関する最新の研究成果について、それぞれの研究所から、それぞれの研究所を代表するエース・クラス



の研究者一名と若手研究者一名に口頭発表していただくとともに、四名の研究者も国外から招待し、研究成果を発表していただきました。さらに、各研究所の若手研究者にはポスター発表をしていただく場も設け、合計三十弱のポスター発表がありました。

本シンポジウムは、主管する研究所の特色に合わせたセッションを設けることができるため、今回はがん研究所が力を注いでおります「がん幹細胞」「転移」に関わるセッションを設け、これらのテーマに関連して活発な研究を行われている方を海外からの招待講演者としてお呼びするとともに、各研究所からもこれらのテーマに関連した研究を行っている方にご講演していただきました。本研究所や本学の医学系研究科より参加した研究者は、国際レベルの最新の知見に触れるとともに、各セッションでは大変活発に討議に参加されていきました。さらに、多くの方が懇親会にも参加し、外部の研究所からの研究者の方との熱心な交流をされていきました。これらのことを通して、参加された研究者の方の研究の進展に些少なりとも貢献できたのではないかと思っています。

本シンポジウムは、医学系研究科博士課程の単位認定が認められたこともあり、本学の医学系研究科の博士課程の多くの学生も参加していました。参加された学生の多くが講演会場やポスター会場での討議に積極的に参加されており、医学系研究科の教員も兼ねている身としては、医学系研究科の将来に大変心強い気持ちになりました。

(向田 直史 記)

金沢大学関連病院長会議

金沢大学関連病院長会議は、金沢大学関連病院長(石川ブロック四十四、富山二十三、福井十三、関東関西その他三)と金沢大学附属病院診療科長(教授、病院臨床教授・医局長など)により構成されています。本年度の金沢大学関連病院長会議は、平成二十二年七月三日(土)十四時三十分からホテル日航金沢で開催され、九十八名(関連病院からは五十九名、大学病院からは三十九名)の参加のもと、総会及び意見交換を行い懇親を深めました。総会議事においては会計報告、役員の異動報告などに引き続き、金沢大学附属病院長として重点的に以下の内容を述べさせていただきました。

①「医師の育成と臨床研修医制度について

「臨床医師は二年間の研修期間で一人前になれるものではなく、六十年かけて広く深く経験を積みながら一人前に育っていくもの」という当たり前のことがようやく「研修医・お役人」の双方にわかってもらえたように、厚生労働省はそれを反映して昨年、思っていた臨床研修医制度の大幅軌道修正を行いました。そのおかげで北陸では大都会への研修医の大流出が鎮静化し、金沢大学附属病院では研修医が増員し、外科系志望者も増えました。また厚生労働省指針として

「これからは大学病院のような大規模病院を中核とし、地域医療機関と連携を持つ「地域医療コンソーシアム」を組んで若手医師を育てていっていただきたい」との記述があることも追加し、中央省庁の注目すべき意識変化であるとして紹介しました(ちなみに、これらの改革こそが私たちがこれまで堅持してきた関連病院長会議の理念に合致するもの

のです)。

しかし、全国の地方医療を見渡すと必ずしも樂觀できる状況ではありません。来年度の研修医の動向が重要なので、引き続き、各関連病院と協力して若手医師の育成に、愛情と熱意をもって一層力を入れていきたい旨、協力をお願いしました。

②「石川県地域医療支援センター」について

金沢大学附属病院内に設置されている「石川県地域医療支援センター」、「金沢大学附属病院・医療支援機構」に対して、有志ある各関連病院長から、医師育成支援、地域医療の支援を主眼とした寄附をいただいていることへの御礼を述べ、その用途明細を説明しました。特に今年度は主に指導医・研修医の情報交流会や研修医の周辺環境の整備備品の一部に充てることができた旨を報告しました。

③「石川県地域医療再生計画」について

石川県が推進している「石川県地域医療再生計画」について、特に能登北部地区及び南加賀地区を中心とした医療再生に向けて、金大附属病院が中心となり尽力していきたい、各関連病院の一層の協力をお願いしたい旨を述べました。

その後、「近年の医師の動向について」と題して長瀬教授から特別講演があり、なかでも「女性医師が今後も漸増していくことが確実なので、それに向けて病院内環境整備が重要であり、医師不足の解決策のポイントの一つである」ことなどが提言されました。

その後の懇親会でも各関連病院長と金大附属病院の先生がたと、和やかで熱心な意見交換、交流が行われました。

来年は七月二日(土)金沢大学附属病院・宝ホールでの開催予定が確認されました。

(富田 勝郎 記)

御遺骨返還式・合同慰霊祭

平成二十二年の御遺骨返還式・合同慰霊祭は六月十九日(土)午前十時、十全講堂での文部科学大臣感謝状伝達式から始まった。池森順一総務課長による開式の辞にはじまり、平成二十一年度献体者のご芳名が拝誦され、井関尚一医学類長よりご遺族おひとりおひとりに文部科学大臣感謝状が伝達され、感謝の言葉をご家族の皆様に述べられた。

献体者御遺骨返還式は午前十時半から、ご遺族の皆様、しらゆり会会長 井沢義武様、理事長 竹山雅万様をはじめとした、しらゆり会役員の方々、会員の皆様にご出席いただき、井関尚一医学類長、医学系研究科・医学類と附属病院の教職員、医員、学生が出席して始まった。成願者二十五名のご冥福を祈って黙祷をさされた後、祭主の井関尚一医学類長が追悼の言葉を述べられた。出席者全員が壇上の御遺骨に感謝の気持ちをこめて献花をし、井関尚一医学類長から御遺骨がご遺族に返還された。最後に学生を代表して岡直輝君(三年生代表)が感謝の言葉を申し上げ、解剖学教育と献体業務の担当者を代表して神経分布路形態・形成学分野 尾崎紀之が感謝とお礼の言葉を申し述べた。合同慰霊祭卯辰山墓地法要は午後一時から金沢大学医学部卯辰山墓地において、覚林寺ご住職のご読経とご講話を賜り、肅然と営まれた。ご遺族としらゆり会の皆様のご臨席を仰ぎ、井関尚一医学類長、大学教職員と学生が参列し焼香、参拝した。この墓地には、明治二十年の第四高等学校医学部(川瀬泰輔教授の

御時)から現在に至るまでの約六千名の献体者の芳名墓碑が三十四あり、井沢義武会長のご尽力もあり、金沢市よりその整備についてご配慮をいただいている。午後二時、十全同窓会が平成十四年十月に修造して下さったホルトルマン愛児(明治十二年歿)の墓碑にも奉拝した。

第一〇八回合同慰霊祭は午後二時半に始まった。祭壇には正常解剖と病理解剖にお体を捧げられた一六九名のご芳名を記した聖額が立てられ、ご遺族とご来賓、しらゆり会役員ならびに会員の皆様のご臨席を仰ぎ、井関尚一医学類長、松井修研究科長、三邊義雄附属病院副病院長、医学系研究科・医学類・附属病院の教職員、そして学生が参列した。黙祷の後、井関尚一医学類長が追悼の言葉を述べられ、出席者全員が献花をされた。最後に三邊義雄副病院長が謝辞を述べられ、午後三時半過ぎに終了となった。

七月八日(木)、金沢大学医学部卯辰山墓地で献体者孟蘭盆会法要が営まれた。しらゆり会会長 井沢義武様、しらゆり会役員の方々のご出席を仰ぎ、井関尚一医学類長をはじめとする医学類の教職員多数の方々が参列された。覚林寺ご住職のご読経を賜り、参列者一同で献体者の冥福を祈った。



(尾崎 紀之 記)

医学展開催に向けて

昨年度に引き続き、今年度も医学展を開催することが決定致しました。二〇一〇年度医学展開催に向けて、同窓会の皆様方にはご支援、ご協力を賜り、医学展実行委員会一同深く御礼申し上げます。

今年度の医学展ではテーマを「OPEN」とし、ヒトの体にあるたくさんの不思議や感動を来場者にご実感・ご体感してもらい、そのことがとつきにくかった医学への扉を開くきっかけになってほしい、という想いで準備を進めています。毎年好評いただいている「人体迷路」に加え、健康チェック・内視鏡体験・BLS講習・リハビリ体験を行う「模擬病院」、「キンストレーキ・解体新書の展示」、主に地域の方の自らの体験に基づく医療に対する想いを集めた「気持ち企画」など、様々なものを予定しています。

一学生にすぎない私個人の意見を書いておこがましいのですが、私は、関わった人・来て下さった方双方にとって、この医学展が「医学」を振り返る・考える・触れる機会になってほしいと考えています。学生にとつては、これから自分たちが関わっていく「医学」を見つめなおす場であり、自分たちの想いを形にすることができる数少ない場。来て下さった方にとつては、自分の体について扱う医学に触れることができる数少ない場。それらを繋いでいるのが「医学展」です。医学展という場を通して、楽しみながら医学を見つめなおし、その結果様々な人と関わることであったらいいだろうか。

学生という立場でこのような機会をいただいたことに十分感謝しながらも貪欲に取り組んでいく所存でありますので、ぜひお時間を見つけて足を運んでいただけたら幸いです。末筆ではございますが、日ごろからのご支援、ご鞭撻に感謝して挨拶とさせていただきます。



(医学展実行委員 委員長 五年 平木 咲子 記)

病院紹介

金沢赤十字病院

沿革

日本赤十字社の前身は、明治十年西南戦争を機に設立された救護団体「博愛社」で、明治二十年に日本赤十字社と改称されました。名誉総裁に皇后陛下を頂き、人道的国際活動、救護活動、医療事業、看護師養成事業、血液事業、社会福祉事業、救急法等の講習、赤十字活動とボランティアの八事業を世界の赤新月社や赤十字社とともに展開しています。その一つに医療事業があり、日本全国に現在九十二の病院が開設されています。金沢赤十字病院は大正十九年七月に「日本赤十字社石川県支部産院」として全国二十七番目の医療施設として発足し、昭和二十八年四月に金沢赤十字病院と名称を変更、昭和四十三年十月に現在の金沢市郊外三馬の地に、石川県から委託を受けた老人病棟一〇〇床と一般病棟一〇〇床、合計二〇〇床の病院となって移転しました。その後老人病棟が二〇〇床となりましたが、平成九年七月に石川県立老人病棟全病棟が赤十字病院に移管され全三〇〇床が一般病棟になりました。この間、整形外科や脳神経外科、眼科などの常勤医を招聘し、健診センターも開設しました。平成十一年四月に増築改修工事が完成しました。平成十九年四月に血液浄化センターを増床、救急外来とともに新築しました。

現況

金沢赤十字病院と言えば、昭和五十年代故遠藤元院長が率いる産婦人科に多くの妊婦さんや患者さんが集まり、年間出産取扱数千件を超え、手術件数も多かった時代の「産婦人科の日赤」というイメージを今でもお持ちの方も多いようです。しかし、平成十八年度からは医師不足のあおりを受けて産婦人科の常勤医が不在となり、出産や婦人科手術は不可能となりました。そこで①糖尿病および生活習慣病・腎②消化器内科・消化器外科③整形外科および脳神経疾患とそのリハビリテーションの三本を当院の診療の柱とし、患者さんの便宜なども考え、糖尿病・腎センター、消化器病センター、回復期リハビリ病棟などを設置してきました。一方、県立老人病棟が委託されていた関係から当院の医療スタッフは伝統的に高齢者医療に関するノウハウを持っており、また診療報酬に収載される前から訪問看護を実践し、県内でも早くからリハビリテーションのスタッフを充実させ、高齢者に対する医療、看護に力を入れてきました。

最近では一病院完結型の医療ではなく地域完結型の医療・介護が常識となっていますが、当院でも地域医療連携室を中心に病診連携、病病連携に力を入れ、開放病床三十五床を設置し、地域の開業医からの紹介率および逆紹介率が向上しています。また、金沢大学附属病院との連携も強く、手術など患者さんにとって一番有益となる医療を役割分担しながら遂行しています。

当院は、現在診療科十六科で常勤医は二十八名、非常勤医師が三名で、その大

多数が金沢大学医局出身または派遣医師です。平成二十一年四月からDPC病院となり、日本医療機能評価機構JCAHOの認定を受けており、現在は協力型臨床研修病院ですが、基幹型に認定されるべく努力を行っているところです。

展望と課題

昨今の社会現象ですが、当院でも呼吸器内科医、循環器内科医、整形外科医、婦人科医、泌尿器科医などが不足しています。しかし、大小の病院が集中している金沢およびその周辺の病院の分布が今のままでいいのかどうかは議論の余地がありますが、

一病院でどうなるものではありません。現実には大学の医局にお願いして医師を確保する努力をするしかないようです。一方、一部の建物が老朽化してきていることや、いわゆる電子カルテと言われる院内情報管理システムの導入などの課題も今後解決の必要があります。

しかし、当院は家庭的雰囲気の中、金沢大学医局のおかげで有能な医師が揃い、赤十字の伝統から患者さんにやさしい看護を目指すナースが多く、その他スタッフも真面目で熱心な人が多いので、安全で信頼される医療を通して地域社会に貢献できるように力を合わせて努力しています。



今後はやはり内科、外科、整形外科を中心に、金沢大学附属病院をはじめとする近隣の病院との病院連携をますます強め、一方では地域の診療所等との連携を広げ、地域の中で当院の力に見合った質の高い医療が展開できるように努力していきたいと考えています。今後とも十全同窓会関係各位のご協力をよろしくお願いいたします。

(院長 岩田 章 記)

病院紹介

国家公務員共済組合連合会
舞鶴共済病院

沿革

舞鶴市は明治時代より軍港として栄え、多くの公的機関が設置され、人口は十万人を超え、当時より三病院を必要とする京都府北部で最大の核地域であった。戦後、舞鶴鎮守府海軍病院は国立舞鶴病院に、財団法人海仁会病院は舞鶴市民病院に、そして舞鶴海軍工廠職工共済会病院は舞鶴共済病院へと名称を変えた。その後、舞鶴赤十字病院が開設され、人口十万人都市としては稀な医療充実都市が形成された。終戦後に、当院は国家公務員共済組合連合会（KKR）が運営する全国三十五万所の病院群に属し、職域病院から広く一般市民を対象とする医療機関と生まれ変わり、平成十九年三月に創立百周年を迎えた。当院は準公的病院として位置付けられ、公的資金の援助を受けず独立採算で、永らく地域医療に貢献してきた。この背景が、当院の理念である「患者さんに良質で安心していただける医療」を「効率よく提供」する原動力となり「健全な病院運営」を続けてきた。この永年培われた自立心は徹しい医療政策を生き抜くための大切な精神であり、この事が当院における他職種間にもとより各診療科間の垣根が低いことやチームワークの良さ（結束力）に繋がっている」と自負している。

京都北部地区の医療事情の変遷

戦後、この小さな地方都市に公的病院が存在し、かつ、各々の病院の設置母体や支援大学が異なることから自ずと病院間の生存競争が発生。舞鶴地区は近隣の市町村と比べて、新しい医療技術の導入やサービスの向上が著しかったため、舞鶴地区の医療を求めて、近隣から流入する患者は相当数に上り、診療圏の推定人口は二十万人を優に超えていた。しかし、平成に入り近隣の福知山市、宮津市、綾部市等の自治体病院の診療機能が飛躍的に充実し始めると、徐々に舞鶴市の病院過密地帯に異変が始めて来た。舞鶴市内四病院に通院する総患者数の減少（周りの市町村の患者が地元の病院で治療を受けるようになった）により、表現としては些か不適切ではあるが、いわゆる勝ち組、負け組に次第に分かれる状況となった。このような背景の中、急性期病院を利用する入院患者が減少し、平成十一年に舞鶴赤十字病院（京都府立医科大学関連病院）は一般病床一九八床の内、四十八床を療養型病床に変更。さらに、新卒後研修制度が開始された平成十六年四月、舞鶴市民病院（当時は京都大学医学部関連病院）の内科医師が突然の集団退職。舞鶴市民病院が決定的な負け組となり、その後、数十億の財政援助をしているが、現在も一般病院としての機能は果たせていない。私が舞鶴共済病院に赴任した昭和五十五年頃は、舞鶴国立病院（京都府立医科大学関連病院。現・舞鶴医療センター）が圧倒的優位に立つ総合病院であったが、平成十年頃より次第に勢いに陰りが見え始めたため、平成十二年に救急センターを設置、巻き返しを図

り、その後の数年間は勢いを取り戻すも、平成十六年頃より医師不足の影響が徐々に始め、多くの外科系診療科（耳鼻咽喉科、眼科、泌尿器科、産婦人科等）の医師が一人体制となり、三九五床あった一般病床は、平成二十年からは三三九床に減少した。

舞鶴地域医療の問題点

最近、新聞などで舞鶴地区の公的病院再編計画が話題となっている。平成十九年に舞鶴地域医療あり方検討委員会が発足し、七回の議論を重ねて、「将来的に一ないし二病院にまとめ、できれば一つの運営母体で管理する」の結論が舞鶴市長に答申され、それを受けて平成二十一年四月に公的病院を一つに纏める再編グラントデザインが発表された。各病院の設立母体、支援する大学病院、医療実績、経営状況、病院職員の気持、等を全く無視したデザインには多くの無理があり、我が病院は平成二十一年九月に再編計画から離脱することを正式に表明した。

当院の現状と今後の展望

当院の病床数は三二〇床（CCU・ICU十床を含む）で、標榜診療科は内科、消化器内科、循環器内科、心臓血管外科、一般外科、小児科、整形外科、泌尿器科、産婦人科、皮膚科、耳鼻咽喉科、眼科、口腔外科、麻酔科、放射線科、リハビリテーション科の十六診療科があり、平成二十一年度の平均在院日数は一三・一日、病床稼働率は八九・一％、紹介率は四三・八％、外来診療単価一一、三二四円、入院診療単価五一、二二八円であり、急性期病院としての役割を果たしている。当院に常勤医師を派遣して戴いてい

る大学は、金沢大学医学部、福井大学医学部、京都府立医科大学、京都大学医学部、岡山大学医学部（平成二十一年七月より常勤麻酔科医二名）で、外来診療の支援として金沢医科大学が挙げられる。すべての外科系診療科の医師は二名以上の常勤医があり、手術件数は京都府北部で最も多く（平成二十一年度DPCデータ）から、京都府下では十一番目、石川県に当てはめると五番目に手術が多い。当地域の基幹病院として住民から頼りにされている。舞鶴地区の住民が手術治療を含めた最新治療を都会に住む方々と等しく享受できる態勢を築くことを目標としている。このような状況を配慮し、当院の経営ビジョンとして、①地域における循環器系（脳神経、心臓、腎臓）医療の拠点化、②地域がん医療の拠点化、③救急医療の充実、④健診管理部門の充実の四本柱を掲げ、その実現に向けて努力している。

当院の診療体制をより強固なものにするために、現在、新棟の整備計画が進行中で、平成二十五年の完成を目指している。これを機に、①疾患群別のセンター化、②放射線治療装置を新規に導入し、癌治療の充実 ③個室率を高めることにより患者さんに快適な入院環境を提供 ④海が見える総合医局の開設、を考えている。

最後に、終戦後から現在まで、当院の病院長は金沢大学医学部第二内科の出身であり、金沢大学の絶大な支援を得て運営しております。金沢から遠く離れていますが、今後とも宜しくお願い申し上げます。

（院長 多々見 良三 記）

教室だより

再生分子医学

研究分野について

私たちの所属している再生分子医学研究分野は、一九九八年に金沢大学大学院医学研究科・分子情報医学系専攻・分子病態医学講座として発足しました(初代講座主任…中西功夫教授)。その後、二〇〇一年に横田崇教授が第二代教授として就任し、同年に行われた博士課程の部局化に伴う改組によって、金沢大学大学院医学系研究科・がん医科学専攻・機能再生学講座・再生分子医学研究分野となりました。さらに二〇〇八年に行われた三学域・十六学類制への移行により、金沢大学医薬保健研究域医学系・がん医科学専攻・再生分子医学研究分野となり、現在に至っています。医学系研究科



の修士・博士課程の教育を担当し、これまでに修士五名、博士四名に学位を授与し、現在は修士課程に二名、博士課程に四名の大学院生が在籍して研究を行っています。

研究分野における研究の紹介

私たちの研究室では、主としてマウスの胚性幹細胞(E₃細胞)を研究材料として用いて、幹細胞の増殖や分化の制御機構に関する研究を進めています。E₃細胞は胚盤胞の内部細胞塊から樹立された細胞株で、体内の様々な細胞へと分化できる能力(多能性)を持っています。また最近では人の体細胞からE₃細胞に良く似た性質を持つiPS細胞の作製が可能であることも報告され、E₃細胞やiPS細胞に代表される多能性幹細胞を用いた再生医療に大きな期待が寄せられています。これらの多能性幹細胞を実際に治療に用いる際には材料となる幹細胞を必要な数にまで増幅する必要があります。しかし、多能性幹細胞を通常の条件下で培養すると多能性を持つが故に大半の細胞が分化してしまいます。そのため、多能性幹細胞の自己複製(多能性を保持しながら未分化状態で増殖すること)の分子機構を明らかにして、その知見をもとに効率の良い多能性幹細胞の増幅方法を開発することが求められています。

マウスのE₃細胞の場合には、白血病阻害因子(LIF)と呼ばれるサイトカインを培地に添加することによってその自己複製が維持されることが知られています。そこで私たちは現在、E₃細胞におけるLIFの自己複製シグナルの解明を中心に研究を進めています。これまでに私たちを含む複数のグループによる研

究から、マウスE₃細胞の自己複製においてはOct3/4とSox2、そしてLIFの下流分子であるSTAT3とった転写因子群が重要な役割を担っていることが明らかとなっています。私たちはこれらの転写因子の下流分子の探索を行った結果、ポリコム分子であるEedや、インプリンティング制御分子であるZfp57、Etsファミリー転写因子GABPa、癌遺伝子としても有名なR-catenin、核内オーファン受容体Dax1、新規分子Sdcbpなどの興味深い分子を見出してきました。さらにこれらの分子のE₃細胞の自己複製における役割についても検討を行った結果、次のようなことを明らかにしたので、ここにご紹介いたします。

(I) E₃細胞におけるエビジェネティクス制御と自己複製の関係

E₃細胞の自己複製状態と分化状態の切り替えに伴い、ヒストン修飾が動的に変化することが知られています。私たちはヒストン修飾を介して様々な遺伝子の発現制御を行うポリコム分子Eedの発現量を人為的に変化させることが出来るようなE₃細胞株を作製して、E₃細胞におけるこの分子の役割を調べました。その結果、EedがGata4やOct3/4などの様々な分化関連遺伝子群のプロモーター領域付近に局在し、付近のヒストンのリジン残基をメチル化することによって、これらの遺伝子群の発現を抑制していることを明らかにしました。これらの結果から、STAT3やOct3/4などの転写因子がEedの発現を誘導することによってヒストン構造を調節し、それによって様々な分化関連遺伝子群の発現を

抑制してE₃細胞の自己複製を促進していることが示唆されました。

(II) E₃細胞の自己複製における転写因子ネットワークの詳細な解析

最近の網羅的な解析から、STAT3やOct3/4を含むいくつかの転写因子がネットワークを形成することによってE₃細胞の自己複製を維持している可能性が示唆されています。しかし転写因子ネットワークの実体に関しては明らかになっていませんでした。私たちはSTAT3やOct3/4の下流分子として見いだした分子の解析を進めていくにつれて、いくつかの転写因子がOct3/4とネットワークを形成していることを見出しました。例えば、GABPaはOct3/4リプレッサー分子群の発現を抑制することによってOct3/4の発現を促進していると思われる。また、R-cateninはOct3/4のco-activatorとして働いてE₃細胞の自己複製維持に寄与していることも見出しました。さらにはDax1のように、Oct3/4に結合してOct3/4の活性を負に制御している転写因子の存在も明らかにしました。これらの結果から自己複製の維持において中心的役割を果たしているOct3/4の周囲に存在する転写因子ネットワークの一部が明らかになってきたと考えています。

ここにご紹介しましたように現時点では、E₃細胞の自己複製機構に関する知見を蓄積している段階ですが、今後はこれらの知見をもとに再生医学の発展にも尽くしていきたいと考えています。今後とも同窓会員の皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

(小出 寛 記)

教室だより

細胞移植学

「新しい」内科学講座を売りにしていた第三内科も、本年度で開講四十二年目を迎えました。「第三内科」という愛着のある教室名称はだんだんと使われなくなってきましたが、中尾眞二教授が第三代教授に昇任後、附属病院では「血液内科・呼吸器内科」、医薬保健研究域医学系（大学院医学系研究科）では「がん医科学専攻機能再生学講座細胞移植学」の看板をにかけて最先端の診療と研究に取り組んでいます。また、最近では学生教育や研修医の指導にも全医局員が一丸となって取り組んでいます。

旧第三内科の研究グループは、血液・移植研究室、血栓・止血研究室、呼吸器研究室の三つに分かれています。

血液・移植グループの研究テーマは、



中尾教授のライフワークである「再生不良性貧血（再不貧）の病態解明」と「造血幹細胞移植による難治性血液疾患の治療」です。中尾教授が教室を主宰されるようになってから今年で十二年目を迎えますが、現在も直接、若手の研究指導をなされています。

再不貧における免疫病態の関与を診断する上で、現在もつとも簡便で信頼のおける検査法は、当教室で開発された「高感度フローサイトメトリーを用いた発作性夜間ヘモグロビン尿症（PNH）型血球の検出」です。このアッセイの重要性が広く認知されるようになったため、今では全国の血液内科医から検査依頼があります。その解析結果と治療方針のアドバイスを杉森尚美助教からお知らせしています。山崎宏人講師（医局長）は「再不貧における免疫病態マーカー」の意義を明らかにするための多施設共同前方視的臨床試験」を主導し、歴代の大学院生たちが見つけた免疫病態マーカーが骨髓不全の日常臨床に役立つか否かを検討中です。さらに、大学院生らが中心となって、多系統の血球におけるPNH型血球の有無を調べることで造血幹細胞の分化経路の解明を目指す壮大なプロジェクトも進んでいます。

高見昭良准教授（輸血部長）は、厚生労働省班会議・日本骨髓バンクとの共同研究として同種造血幹細胞移植の患者・ドナーにおけるSNP解析を行い、移植転帰に影響する複数のSNPsを見出しました。HLA検査とSNP解析を組み合わせることで、移植成績が最も良くなる「理想のドナー選び」が将来可能になるかもしれません。近藤恭夫助教（外来医長）は、留学先での研究を進展させ、抗GIR抗体を

併用したCDK2ペプチドワクチンの臨床応用を目指しています。また、当科は日本最大の血液腫瘍研究組織である日本成人白血病研究グループ（JALSG）に参加しています。グループコアメンバーの大竹茂樹教授（保健学科）のサポートを受けながら、各種の臨床試験に参加しています。新研修制度の導入後、教育の重要性が一層増しました。新任の小谷岳春助教は病棟での学生教育・研修医の初期教育を担当し、評判も上々のようです。

先代の松田保名誉教授が基礎を作られた血栓・止血研究室は、「血栓症の克服」をスローガンに研究を進めています。チーフの朝倉英策准教授（高密度無菌治療部）は播種性血管内凝固症候群（DIC）の病態解析と治療法の改善をメインテーマとしています。朝倉准教授らが提唱したDICの病型分類（線溶抑制型と線溶亢進型）は、血栓止血学会でもその有用性が広く認められています。森下英理子准教授（保健学科）は先天性凝固異常症の遺伝子解析を専門としており、全国の先生方から様々な欠損症の解析依頼を受けています。山崎雅英講師は抗リン脂質抗体症候群（APS）の病態解析に挑む傍ら、不育症や強皮症の診療にも力を入れています。本グループは、薬学部、大学院生や附属病院検査部血液検査室のスタッフとの共同研究がさかんです。また、全身臓器に広がる血管を研究の対象としていることから、血管外科はもちろん皮膚科・産科等、様々な診療科・研究室と横断的に臨床と研究を進めていることも大きな特徴の一つです。

呼吸器研究室は、対象疾患別に三つのサブグループに分かれて基礎研究に取り組んでいます。気道疾患グループは、慢性閉塞

性肺疾患、特に「アトピー咳嗽」と「慢性咳嗽」における咳嗽の発生機序の解明と治療法の開発にターゲットを絞っています。藤村政樹准教授の指導のもと、大倉徳幸助教や大学院生たちが中心となって、咳嗽発生における気管支平滑筋とAΔ神経線維との関係やアトピー咳嗽に対するマクロライドの新作用など、アトピー咳嗽や喘息の咳嗽発生機序に関するユニークな研究成果をいくつも発表しています。また、片山伸幸助教（病棟医長）らが中心となって、慢性咳嗽の原因疾患調査などの疫学調査も進められています。

間質性肺炎グループでは、早稲田優子医員ら子育て奮闘中の若手女性医師が中心となって臨床と基礎研究に従事しています。間質性肺炎患者の乾性咳嗽は実はそのほとんどが合併する慢性咳嗽が原因であること、現在注目されているIgG4関連疾患では好酸球性気道疾患の合併が多いことなど、新知見をいくつも見出しました。また、基礎研究では肺の線維化に関する研究をすすめています。

肺がんグループでは、笠原寿郎講師（外来化学療法室長）の指導のもと、大学院生が中心となって肺がん治療薬ゲフィチニブ（イレッサ）に関する基礎研究をすすめています。また、地域連携腫瘍内科学講座の曽根崇特任准教授や関連病院の先生方と共同で、非小細胞肺がんに対する多施設共同臨床試験をいくつも展開しています。

第三内科は「成果が臨床にすぐ還元できるような臨床に近い研究」をモットーに、世界を視野に入れた研究に取り組んでいます。まだまだ「若い」第三内科の伝統をますます発展させるべく、医局員一同努力してまいります。（山崎 宏人 記）

支部だより

滋賀支部

平成二十二年度十全同窓会滋賀県支部総会、懇親会は、六月十三日(日)午前十一時から草津市内にあるホテルポストンプラザ草津で開催されました。当支部の会員数は現在五十七名です。昨年度の移動は、転入三名、転出二名、亡くなられた方三名でした。お集まり下さいました先生方は総勢十八名でした。十全同窓会本部より来賓として金沢大学学長中村信一先生に奥様ご同伴でお出で頂きました。まず当番幹事の三宅隆先生の司会に始まり、浅野定弘先生が本年四月保健衛生の功績により旭日小綬章の叙勲を受け



られたことと、三浦克之先生が昨年十二月滋賀医科大学社会医学講座の教授に就任されたことの紹介がありました。ついで支部長浅野定弘先生により今日の厳しい医療状況のお話をまじえた御挨拶があり、ついで朝日晋先生による平成二十一年度会計報告が行われました。

総会に引き続き中村信一先生により「地域に立脚し世界に飛躍する『新生金沢大学』への進化」我が国ベスト10大学を目指して」の演題で特別講演をして頂きました。まず学部学科制から学域学類制への変革や、地域と世界に開かれた教育重視の研究大学を目指す基本理念のお話、世界的な研究拠点形成のビジョンのお話をして頂き、ついで附属病院や宝町キャンパスの新病棟建設や新改築の進捗状況のお話、角間キャンパスにおける金沢大学の素晴らしい建物の紹介を多数のスライドを使って説明していただきました。高邁な理念とビジョンを基に変革が進んでいる母校の様子に、感激するとともに、さらなる期待を込めながら拝聴致しました。

続いて十二階に移動し懇親会が行われました。和洋折衷の美味しい料理とお酒を頂きながら、それぞれ懐かしい金沢時代の思い出を話し合ったり、近況や、最近の厳しい医療情勢のことなど、時間を忘れて歓談が続きしました。

終了後、中村信一先生をお送りした後、名残惜しい十数名の方々は一階のラウンジに移動し更に旧交を温めました。皆様ここでもお酒が入って、気持よくお話もはずみましたが、午後四時過ぎに来年の再会を約して散会となりました。

来年度の滋賀県支部総会は、滋賀医科大学

大学の先生方に当番幹事をお願いし、平成二十三年六月の第二日曜日に開催される予定です。

当日の出席者

山口 勝 (昭和十九年卒業)
九谷 修 (昭和二十五年卒業)
宮浦 靖郎 (昭和三十六年卒業)
江竜 喜史 (昭和三十九年卒業)
笹井 三郎 (昭和三十九年卒業)
白石 制 (昭和四十一年卒業)
浅野 定弘 (昭和四十二年卒業)
三宅 隆 (昭和四十三年卒業)
朝日 晋 (昭和四十五年卒業)
眞下 六郎 (昭和四十六年卒業)
山本 明 (昭和四十六年卒業)
桑原 正喜 (昭和四十九年卒業)
谷 徹 (昭和五十二年卒業)
榊田昌之助 (昭和五十二年卒業)
中西 二 (昭和五十二年卒業)
伊藤 誠 (昭和五十四年卒業)
三浦 克之 (昭和六十二年卒業)
齊木 雅章 (平成三年卒業)

(眞下 六郎 記)



クラス会

金沢大学医学部

三十九年卒業同窓会

毎年開催されている三十九年卒業同窓会、今年は福井県在住者が担当となった。福井で開催する時は、芦原温泉が多かったため、今回は市内のホテルで開催した。最も遠方から毎回皆出席の中島君、姫路から安積君、千葉から井上君ら総勢二十八名が集まった。福井のせいか例年より参加者は少なかったが、大変楽しい懇親会であった。

来年の幹事は、中島君が担当となり遠路山形県酒田へ行くことになった。皆樂しみにしていた。

(福島 克治 記)



昭和四十二年医学部 進学生・同窓会

平成二十二年六月五日(土)、昭和四十二年進学生の同窓会が香林坊のエクセル東急ホテルで開催されました。同日は好天に恵まれ、全国から三十四名の同期生が参加し旧交を温めました。中には卒業後初対面という諸氏も含まれ互いにすぐには名前がでない受付で的一幕もありました。会は物故者への黙禱に始まりテーブル席での宴会に進みました。スクリーンでは金沢医科大学の歴史を収録編集した貴重な映像(十全同窓会より貸出)を九十分に渡り上映し往時を偲びました。一同、改めて本学の歴史の深さと先人の医学に対する熱意に感銘を受けた次第です。続いて出席した諸氏の近況報告に移りリレー方式で壇上からの三分間スピーチに耳を傾けました。還暦を過ぎること数年、参集した全員が健康で現役で要職に就いており、話術も滑らかに一巡したところで予定時間となりました。学生時代の秘話やエピソードも多く披露され、金沢での学生時代の経験が今日の礎になっているとの話に会場では頷く姿も多数見受けられました。東京女子医大の中川君から同大附属第二病院長の井上君(旧姓広瀬)(四十六年卒業)を昨年自ら主治医として病床で看取ったという壮絶な話があり一同、改めてご冥福を祈りました。戦直前、直後の食糧難に胎児期を過ごした我々の年代は儉約遺伝子の後生的影響?によってさぞメタボ状態かなと予想されましたが、比較的スマートな体型の諸氏が多かったのも意外でした



(写真は同伴者四名を含む)。皆、健康管理には熱心でジム通い、ランニング、ゴルフ、登山、サイクリング、スキーなどの快適な汗を流してスポーツを楽しんでいるようでした。異色の趣味としては一〇〇kmマラソン、大規模菜園、海中ダイビングなどがあり、医業の傍ら悠々自適のセカンドライフ真只中という誠に羨ましい君もおり人生いろいろ医者もいろいろの印象を受けました。宴もたけなわとなり、今後の開催予定について話が進みました。今回四十二年進学としたのは卒業年度が複数年度に渡り通常の卒業年度でまとめることができないという理由がありました。次回か

らは天孫会という名称で開催することで意見が一致しました。天孫会の由来は故西田尚紀名誉教授の命名によるものです。先生を当時金沢大学医学部で活躍していた四十六年卒業の同期生から成る有志の会(約十名)にお招きした際に「君たちは大学で仕事をするにはTensionを持つことが肝要である。だからこの集まりは天孫降臨の天孫会(Tensonに掛けて)にしてはどうか」に由来するものです。西田先生らしいユーモアと戒めが込められており最も相応しいということと決定しました。

会は盛會裡に閉会となり、一同、市祭百万石パレードの余韻が残る初夏の香林坊へと繰り出しました。翌日、有志による二組のゴルフコンペが片山津GCで行われました。ちなみにスコアは九十六TY氏がベストクロスで参加者は前日の睡眠不足が影響したようでした。

末筆ながら貴重な金沢医科大学の歴史DVDの貸出にご尽力いただきました山本博字域長並びに十全同窓会事務局に深謝致します。

(幹事…藤井、川崎、坂東、文責…宮森 勇)

同窓生の消息

第四十六回 日本周産期・新生児医学会

去る七月十一日(十三日)に神戸国際会議場をメイン会場に第四十六回日本周産期・新生児医学会を主催させて頂きました。本学術集会の会長は産科医、新生児



特別講演の大江健三郎氏に感謝状を進呈する(学会長)

科医に加えて五年に一回小児外科医が務めております。本学術集会の企画は次の四つのコンセプトに基づいて行いました。一つ目は「小さいいのちを救い、大きなみらいを支える―EBMとNBM―」をメインテーマとし、それに基づいた企画プログラムを中心に据えること、二つ目は一般演題の発表を全て示説にすること、三つ目は国際セッションを充実させること、四つ目は参加者が楽しめる学術集会にすることです。メインテーマは胎児発育障害や周産期の治療的侵襲は生涯に亘って身体的にも精神的にも重大な影響をもたらす、そのために予防は周産期から始めなければならない、治療とフォローアップはNarrative-based Medicine(NBM)に基づいて成人に達するまで行わなければならないという考えに基づいております。このような考えから「Small for Gestational Age (SGA) の病態と予防」「周産期からの虐待予防」及び「胎児診断と倫理」をメインシンポジウムとし、「小さいいのちへの医療侵襲とこころの発達」を教育講演として、それぞれメイン会場で一つだけのプログラムとして行いました。その他「母胎救命救急の限界」「社会的リスクと周産期医療」「壊

死性腸炎の病因と予防」「周産期医療と再生医学」「Global Health: Challenges and Opportunities」など時機に合った九つのシンポジウムと「妊婦健診体制を再考する」「周産期医療と倫理」「重症染色体異常症例に対する周産期ケア」「ハイリスク新生児の長期フォローアップにより明らかになった諸問題」など四つのワークショップを行いました。示説発表だけの演題募集でしたが、国内から九〇〇余題、国外から三十の応募がありました。国外からは十一名の講師と四名のシンポジストを招待致しました。特別講演の大江健三郎氏には最も弱い者の視点から周産期医療従事者に聞いて欲しい『ひとりの苦しめられた子供の一滴の涙』を

医師会コーナー

平成二十二年度 医療保健学域特別講義

石川県医師会理事 小川 純

金沢大学医療保健学域医学類一年生に対する特別講義も今年度で三回目を数えることになった。石川県医師会が中心となり学生に講義を行うもので、二年前から始まった。第一回の六月八日(火)から第五回の七月六日(火)まで、一週間に一度合計五回にわたり各九十分の講義を行った。内容は以下のとおりであった。

一、日本の医療制度、世界の医療制度
石川県医師会 会長

小森 貴 先生

話して戴きました。招待講演は童話作家の宮川ひろ氏に『子どもの頃もらったもの』を、また獣医師の竹田津実氏には『野生からの伝言』を御講演戴き、何れも会員に深い感銘を与えられました。会長講演として『小さいいのちを救い、大きなみらいを支える』EBMとNBM』を講演し、周産期医療の一角を担う新生児外科を例にとつてEBMと同時にNBMの重要性を強調致しました。有料参加者は医師二、一〇名、コメディカル三六〇名、招待者一五〇名、学生七〇名で、参加総数二、六〇〇名余で過去の記録を大幅に更新致しました。

(大阪府立母子保健総合医療センター)

小児外科 窪田 昭男 記)

芳珠記念病院 小児科

多賀 千之 先生

小森会長からは医療制度全般、医師会、また医師の心構えなどを、ある時はユーモアを交え学生に語っていただいた。多賀先生からはご自分のアメリカ留学時代の経験を交え日本の医療制度の優れた面をご紹介いただいた。

二、各診療科、現場からの声

石川県医師会理事 内科

洞庭 賢一 先生

石川県医師会理事 外科

大平 政樹 先生

柴山クリニック 内科

柴山 真介 先生

サンクリニクやまだ 小児科

山田 燦 先生

石川県医師会理事 内科

小川 純

冒頭にそれぞれの先生方に今の科目を選ばれた理由、実際の医療現場での体験をお話いただき、今回、初めての試みとして後半は小グループに分かれた学生のテーブルに行つてディスカッションをしてもらった。五つのテーブルを順に回っていただいたためグループに五分開くらいいかられず、せわしかつたが、学生はそのほうがしゃべりやすかつたといえ、活発に発言していた。

三、女性医師の体験談

金沢医科大学病院

赤澤 純代 先生

芳珠記念病院

野竹早智子 先生

女性医師のお話はいつも学生に人気がある。医科大に女性外来を作られた赤澤先生の今までの苦労、そして今後の展望などのお話、野竹先生には麻酔科での経験に始まり現在の部署までの道のりを、両先生ともにしつかりとした口調で、きつぱりとお話しされた。学生ならずとも私も聞き惚れてしまった。

四、勤務医の体験談

金沢大学研修医

金沢大学研修医

金沢大学研修医

金沢大学研修医

金沢大学研修医

金沢大学研修医

金沢大学研修医

金沢大学研修医

金沢大学研修医

金沢大学研修医

金沢大学研修医

金沢大学研修医

今回初めて在宅医療の話が取り上げられた。在宅で繰り広げられる家族ぐるみの診療に目を見張ったのではないだろうか。

六、過疎地域医療の体験談

石川県立中央病院 消化器内科

辻 国広 先生

石川県立中央病院 循環器内科

寺本 了太 先生

過疎地域とくに離島診療の経験談は学生にきつと新鮮に映つたに違いない。

七、新型インフルエンザ対策

小松市民病院 小児科

上野 良樹 先生

北谷クリニック 小児科

北谷 秀樹 先生

金沢市立病院 呼吸器内科

中積 泰人 先生

昨年勃発した新型インフルエンザには医療機関、行政ともにその対応に四苦八苦した。何より敵の正体がわからない、対処方法がわからない、そのような中で診療所と病院が協力して立ち向かつていった姿の紹介がなされた。

八、医師会について

石川県医師会理事 小川 純

学生も、若い研修医からベテランの開業医まで第一線で活躍する医師による話を聞いたことが印象的で刺激的だったらしく、来年も続けてほしいという声が多く聞かれた。来年も内容を吟味し是非学生に話をしていきたいと思つている。今回ご参加いただいた十九名の先生方に感謝を申し上げます。

医学部百五十年史のための覚え書【29】

官立医学専門学校の大学昇格順位について

赤祖父 一知

明治二十年（一八八七）に官立高等学校医学部として設置され、のち高等学校医学部となり、明治三十四年（一九〇一）勅令により官立医学専門学校として独立したのは、金沢と同じ歴史を有する千葉、仙台、岡山、長崎の五校であった。これに加えて、明治四十三年（一九一〇）に新潟医学専門学校が官立として新設され、計六校となった。

これら六校のうち、仙台医学専門学校は明治四十五年（一九一二）七月三十日大正と改元）に東北帝国大学医学専門部となり、大正四年（一九一五）同大学医科大学となった。なお同医学専門部は大正七年に廃止された。

大正七年（一九一八）十二月六日に大学令が公布され、残る新潟を含む五校は、大正八年（一九一九）に単科大学令による医科大学への昇格が約束された。

その後、各校の大学昇格の順位をめぐり種々問題もあったが、大正十一年（一九二二）に官立医科大学官制が公布され、大学として授業開始の順序は、大正十一年度に二大学（新潟、岡山）、翌十二年度に三大学（千葉、金沢、長崎）にすると正式に決定された。

この順序の決定は、全国における大学配置の地理的關係を重視した「文部省通牒」によるとされている（『十全會雜誌』第一八一号・大正十年二月一日）。今回、医学部記念館資料室所蔵の「校

長會議々事綴」の中に、正式決定に先立つ大正九年（一九二〇）十二月二十七日付の關係文書を見付けたので、以下原文のまま記す。

資料①

拜啓醫科大學開始順序に關する件本日通牒相成候に付ては其の趣旨御含みの上職員諸氏等の間に自然誤解を生ずるが如き事無之様可然御配慮相煩度候尚大學としての授業開始には前後の順序有之候も官制には可成同時に大學引直しの意味を表はし得る様規定方目下考究中に有之候此義も内々御含置相成度候

敬具

大正九年十二月二十七日

文部省専門學務局長松浦鎮次郎

金澤醫學専門學校長高安石人殿

資料②

大正九年十二月二十七日

文部省専門學務局長松浦鎮次郎 閣下

金澤醫學専門學校長高安石人殿

官立醫學専門學校ヲ引直シテ醫科大學ト為スコトハ確定ノ事實ナルカ大學トシテ授業ヲ開始スルノ順序ハ別記ノ理由ニヨリ左ノ如ク決定シタルニ付右御諒知相成度

大正十一年度

岡山醫學専門學校

新潟醫學専門學校

大正十二年度

千葉醫學専門學校
金澤醫學専門學校

長崎醫學専門學校 以上

資料③

醫科大學授業開始順序ニ關スル件

大正八年度追加豫算トシテ議會ノ協賛ヲ經タル高等諸學校擴張計畫ニ依リ千葉、金澤、新潟、岡山、長崎、ノ五官立醫學専門學校ヲ引直シテ醫科大學ト為スコトハ確定ノ事實ナルカ大學トシテノ授業開始ハ同時ニ之ヲ為スニアラス

大正十一年度ニ於テ二大學大正十二年度

ニ於テ三大學ヲ開ク豫定ナリ然ラハ五校ノ中何レヲ先トスヘキヤ今五校ヲ通觀スルニ新潟ハ創立最新ラシク明治四十三年ニ開校シタルモノナルモ他ノ四校ハ何レモ明治二十年同時ニ高等學校醫學部トナリ明治三十六年同時ニ専門學校令ニ依リ醫學専門學校トナリタルモノニシテ創立ニモ前後ノ別ナク且ツ五校共其ノ規模成績同様ナルカ故ニ其間ニ優劣ノ差等ヲ設ケ之ヲ標準トシテ大學引直シノ順序ヲ定ムルカ如キハ到底不可能トス唯大體全國ニ對スル大學配置ノ地理的關係ヨリ見ルニ千葉醫學専門學校ハ關東ニ在リ金澤醫學専門學校及新潟醫學専門學校ハ北陸ニ在リ岡山醫學専門學校ハ中國（四國ヲモ含ミタル區域）ニ在リ長崎醫學専門學校ハ九州ニ在リ然レニ關東ニハ既に千葉ニ接近シテ東京帝國大學醫學部在リ九州ニハ既に長崎ト比較的近キ所ニ九州帝國大學醫學部在リ之ニ反シテ中國及北陸ニハ從來全ク醫科大學ノ設ケナキヲ以テ政府トシテ各地方ニ偏頗ナリ醫科大學ヲ分布スルノ見地ヨリシテ先ツ中國ニ於テ岡山、北陸ニ於テ金澤新潟ノ中一校ヲ取ルヲ適當トス而シテ北陸二校ノ間ニ於テ金

澤ハ比較的京都帝國大學醫學部ニ近キヲ以テ先ツ之ニ遠キ新潟ヲ先ニスヘキモノトス依テ右ノ通り決定ス、

以上のごとく、官立医学専門学校の大学としての授業開始時期が地理的理由により大正十一年度と同十二年度に二分された。しかし、資料①に考慮中と示されている「（五校）同時の大学昇格」の意味を表わすためにとられた具体的な処置は、大学昇格に先行して行われた千葉、金沢、長崎の各県立病院の官立移管であった。

すなわち、大正十一年（一九二二）三月三十一日の勅令第四百四十二号・同百四十三号による文部省直轄学校官制の改正と官立医科大学官制に従うこととなり、従来の県立病院の一切が学校に交付され、学校附属病院と改称された。金沢では同年四月一日石川県金沢病院が金沢医学専門学校附属病院となり、翌大正十二年（一九二三）官立金沢医科大学発足とともに同大学附属病院となった。

『医院の呼称』中国の古典『周礼』の「博く天下ノ名医ヲ徴シ、以テ大医院ト為ス」に由来し、「帝国大学・官立医育機関には天下の名医が集つてゐる」の意で用いられていた。この名称は、戦後昭和二十三年（一九四八）医療法の改正により病院と公称されることになった。

『追記』旧制官立医科大学は、現在旧六と称されている。その内の一つ熊本大学医学部は、明治三十六年（一九〇三）公布の専門学校令により同年八月私立熊本医学専門学校として認可され、大正十一年（一九二二）五月大学令により熊本医科大学となり、昭和四年（一九二九）四月に官立熊本医科大学となった。

学生コーナー

四年生の今、思うこと

医学科四年 杉森 慎

「君の書く論文が百年残るかどうかわからないが、この同窓会会報への寄稿は、きつと百年経っても残っているよ。」

こうして、会報編集委員長より寄稿の依頼をいただいた。拙筆ながら、多感な医学部四年生の、現在進行形の心境を語らせていただきたいと思う。

早いもので四年の月日が過ぎようとしている。故郷を離れ、生まれて初めての北陸の地に戸惑いながらも、希望に満ち溢れていた一年生。宝町キャンパスでの専門授業が始まり、医学の面白さに心躍らされつつも、その学ぶべき学習量に圧倒された二年生。座学で学んだことを実習で確認し、いよいよ基礎医学から臨床医学へと移行していく中で、改めて、医師になるのだと自覚し始めた三年生。臨床講義の鮮烈過ぎる手術スライドに肝を冷やしつつ、真新しい白衣と聴診器を携えての臨床手技実習に心躍らせる四年生。というのが、理想の、優等生の心境なのだろう。

必ずしも、理想通りの毎日を過ごしてきたとは言えないが、何はともあれ、私もそんな三年余りを過ごしてきたわけで、「二生懸命、勉強せねば」と絶えず努力してきたことだけは間違いない。しかし、いつも勉強というノルマに心を占拠されていたかと言えば、そうではなく、いつも何か満たされない、ハングリーな気持ちに牽引されていた気がしてならな

い。つまり、「充実した生きがいのある一日を、人生を過ごしたい」、そのために「今、すべきことは何なのか?」、「どうすればステップアップできるのか?」、そんなことばかりを考えていた気がする。ある意味では、それが青春なのかもしれない。でも、これはきつと大学生に限らず、社会に出てからの毎日と同じことの繰り返しなのではないかと思うようになった。きつと、授業や勉強が仕事に代わっても、充実した毎日を過ごそうと努力する姿勢を怠ってはならないのだろうし、忙しくても与えられるのではなく、自ら行動し掴み取る、そんな姿勢を養うための準備期間が大学生なのではないのだろうか、と一丁前に考察してみる今日の頃である。

こうした「今、すべきことは何なのか?」という、言わば人生の命題を、否が応にも意識する機会が増えてきた。それだけ「大人」になったと言え、それまでなのだろうが、私は再受験組（人生やり直し組）、ということもあり、友人達の社会人としての船出や、紙面やマスコミを賑わす同世代の活躍を目にするたびに、言いようのない焦燥感と無力感を感じながら、より一層、考え込んでしまう。もちろん、「今に見ていろ、オレだつて!」そんなガッツが無くなつてしまったわけでもないし、こんな私でも二年後の国家試験をパスさえすれば、世間では「お医者様」なのである。

しかし、この「いずれ医師になれる」という安堵感はある意味、砂上の楼閣に思えてならない。確かに医学部というルールは心強いが、単に「医師になる」という終着駅を意識しながら学生生活を垣

送ることは、妥協へとつながってはいないのだろうかと不安になるのである。幼い頃は、誰しも自分の将来に無限の可能性を感じていたにも関わらず、気がつけば、「なれっこない」、「自分なんて...」と自らを卑下し、自身の将来を制限してしまつてきたように、ただ単に国家試験に合格すれば良いという基準を設けてしまふことで、更なる成長を阻んでしまつている気がしてならないのである。一方で、身の程を知る、分をわきまえる、そして、将来を見据える、ということも大切なのだろうか、それは、あくまで発展的結果の積み重ねであるべきで、決して妥協が含まれていてはならないのだと強く自戒してしまふ。こんなことばかりを言っているのは、モラトリウムを求めて再受験したのかと誤解を受けそうだが、いつまで経っても、「自分の将来に無限の可能性を感じていたい」あるいは、「この先四〇年の進路を決断するのを躊躇してしまふ」、そんな二十五歳なのである。

これまで医師という職業を一括りにして話を進めてきたが、もちろん、医師にも様々な形態があり、「どんな形態の医師を目指すか?」を見定めるのが、学生時代の課題ではないかと考えている。基礎系、臨床系の選択に始まり、更には各専門分野を選ばなければならないとなれば、極めて多様であるし、更にその中で、自分らしさやクリエイティビティを求めるとなれば、極めて困難である。私は、もともと研究者に憧れを抱いて入学したこともあり、現在は研究室生活をかじらせていただいているのだが、日々、先人達が築き上げてきた実験方法の緻密さに感嘆するとともに、様々な生命現象を垣

間見られることに言いようのない充実感を感じている。また、英語力の無さには閉口してしまうが、論文やレクチャーを通して、世界の「今」を学べることに、強い好奇心をかき立てられている。目指せ!「百年後も残る論文」なのである。一方で、毎日の怒涛のような講義は、力強く臨床の風を吹かせている。性格上、将来の進路を悩み続けることは間違いないだろうが、今はただ、目の前の課題を一つずつ、着実にこなしていくことこそが最良の処方箋なのだ信じ、一歩一歩、頑張っていく所存である。

特殊な症例なのかもしれないが、恥ずかしながら、ある四年生の生の心境を取りとめもなく語らせていただいた。最後になるが、心に残っている、ある先生のお話を紹介したい。「大学時代に色々な経験をし、色々な感情を味わいなさい。そうして様々な喜怒哀楽を理解することが、将来、患者さんの気持ちの分かる、感情豊かな医師になるためには必要不可欠なのです。」残りの二年間も、ハングリーに、精一杯がきながら、色濃い大学生生活を送れるようお願いしつつ、この振り返りを終えたい。





第三回金沢大学未来開拓研究公開シンポジウムへのご案内

開催日時と会場は、つぎのとおりです。

十三時
講演会

十六時三十分） 交流会

【場所】 東京都港区港南一―八―三十五
KOKUYO HALL

◎参加費＝五百円（当日徴収）

◎申込み締切（二次） 11月8日（金）

◎申込みの連絡及びプログラム等の詳

細の照会は、左記まで。

電話 〇七六—二六四—五〇八一

FAX 〇七六一三四—四〇一五

メール gakuyu@adm.kanazawa-u.ac.jp

ac.jp

(学友支援室長 西谷 公作 記)

金沢大学総務部総務課総務係

電話 〇七六—二六四—五〇一〇

FAX 〇七六一二三四一四〇一〇

メール ffk@adm.kanazawa-u.ac.jp

十一月二十七日（土） K O K U Y

ALLへのご来駕をお待ちいたしてお

ります。

(山本博記)

気象庁が統計を取り始めた一八九八年以来、今年の夏（六—八月）の平均気温が最も高いという発表は記憶に新しいと思います。とりわけ酷暑となりましたが、十全同窓会会員の皆様には益々ご活躍のことと存じます。

会報第一四六号をお届け致します。本年度より、十全同窓会理事長に加藤聖先生がご就任され、新しい体制がスタートしました。佐藤保同窓会長とともに手腕を発揮され、十全同窓会の舵取りをよろしく願ひ致します。

さて平成二十四年に金沢大学は医学部創立百五十周年を迎えることとなります。国内外の情勢が激変している中、この地で脈々と続く金沢大学医学部の歩みの重みを感じざるを得ません。創立百五十周年記念事業を目前に控え、その推進準備委員長である井関尚一医学類長が進捗状況をご報告されています。山本博教授を長とする委員会において、記念誌用作業も皆様のご協力のもと進められています。記念誌用の資料候補がございましたら、ご連絡頂ければ幸いです。

本号には、昨年十二月にご逝去された梅田良三名誉教授の追悼文が掲載されております。先生の講義で学ばせて頂いたことに想いを馳せながら、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

本同窓会会報は、国内外の同窓会員の活躍、ならびに現在の金沢大学の現状をお伝えし、少しでも楽しく、懐かしく、そして喜んで頂ける内容を発信したいと考えております。同窓会の一つの機能として、人のつながりがあると思います。十全同窓会の皆様のつながりを、より一層強固に、有機的に紡ぐ同窓会会報を目指しておりますので、忌憚のないご意見を編集部までお寄せくだされば幸いです。

(和田隆志記)